コロナ禍における
大学の地域交流活動の展開可能性

2022年3月

跡見学園女子大学地域交流センターブックレット

目　次

刊行によせて …… 跡見学園女子大学地域交流センター　2
開会宣言 …… 土居洋平　5
開会の挨拶 …… 笠原清志　6

第１部　2020年以降の各大学の地域交流活動の取組み

地域連携のあり方：学生のwantsと地域のneedsの組み合わせ …… 古市太郎　8
コロナ禍の中の東洋大学ボランティア支援室
　～リアル課外活動が停止した状況の中で～ …… 日比野 勲　14
コロナ禍における地域交流活動 ―跡見学園女子大学の場合― …… 土居洋平　20

第２部　大学に求めること ―活動の担い手に聞く―

コロナ禍での地域映像制作の取組み ―コミュニティバスB-ぐる車内映像制作プロジェクト活動報告―
　…… 山岸樹璃・釜 菜摘・波多江詩織　26
コロナ禍における地域活動：ふじみ野キャンパス編 …… 近日向子・中舘莉子　29
コロナ禍における地域活動：本郷キャンパス編 …… 荒井美咲・駒津舞香　32
シンポジウム報告書
　氷川下つゆくさ荘×跡見女子大 …… 上野穂乃佳・小松美月・佐久間愛美　35
デイキャンプで遊ぼう会
　～千葉県の里親子と大学の共同デイキャンプ～ …… 下田昂輝・杉原みなみ・上田安希子　38
地域のひきこもり支援団体との協働 …… 久保杉真名佳・茶村菜々子　41
地域の食品ロスを減らそう！ …… 鈴木翔太　44
野菜の食育活動 …… 鹿田美那海・関 祥加・高井彩乃・繭山エマ・八田英恵　47
熱中症啓発活動 …… 鹿田美那海・関 祥加・高井彩乃・繭山エマ・八田英恵　50
学生団体TIPSの活動紹介 …… 髙橋由奈・小山田萌佳　53
コロナ禍のスタート ―菊坂跡見塾での活動と今後の課題― …… 菊地春姫・渡邉菜月　56
中央大学ボランティアセンター公認学生団体りこボラ！
　「繋がりを止めるな！ りこボラの挑戦」…… 小松莉子　59
ISR-ConnAction活動報告 …… 髙橋由奈・鎰谷愛希　62
今よりももっとボランティアが応援される社会 …… 渡邉蛍都・杉本昂熙　65
2月11日の文京まちたいわフェスで再開しましょう
　―文京まちたいわフェスと跡見学園女子大学の連携について― …… 井上桃香・釜 菜摘・佐野桃羽　68

刊行によせて

跡見学園女子大学地域交流センター

跡見学園女子大学地域交流センターでは、文京区社会福祉協議会の後援、拓殖大学、東洋大学、文京学院大学の協力を得て、2021年12月25日に公開シンポジウム「コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性」を開催しました。本書は、その報告内容をブックレットとして刊行したものです。

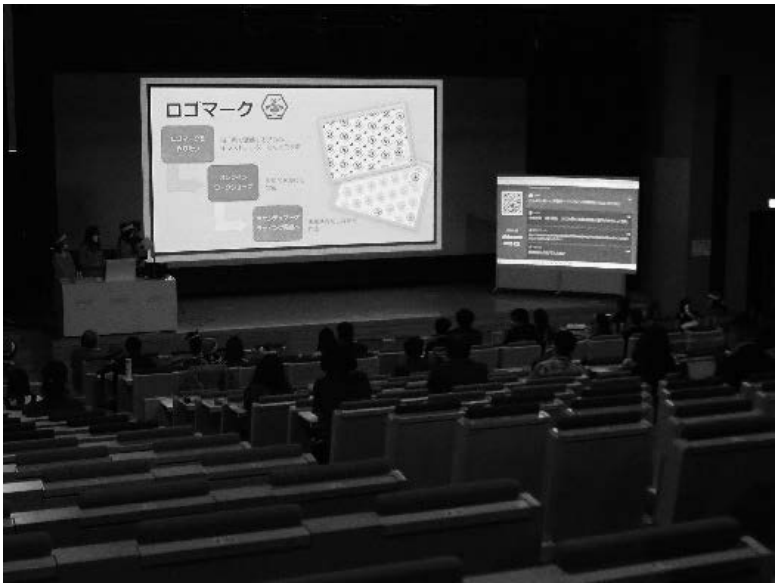
コロナ禍は、地域交流活動にも大きな影響を及ぼしました。それは文京区内の各大学の教職員や学生たちの活動も同様です。しかし、コロナ禍という状況のなかでも、各大学は地域交流活動を継続し、そして学生たちはそれぞれに工夫をしながら地域交流活動を展開してきました。シンポジウムでは、それぞれの大学の教職員や学生たちが直面した課題、課題に対しどのような創意工夫を行ってきたのかを共有することで、大学の行う地域交流活動の意義について、コロナ禍で改めて見つめ直す機会となることが目指されました。

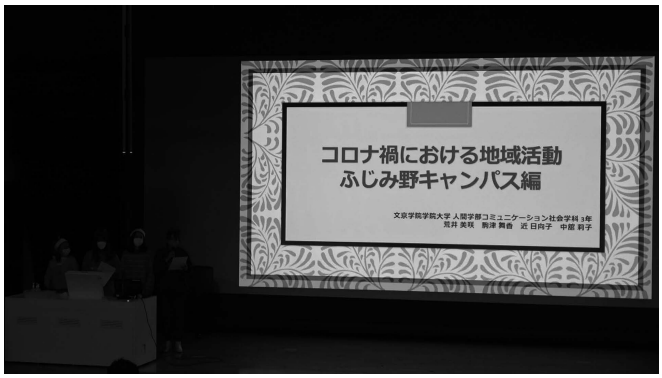
当日は、「第1部 2020年以降の各大学の地域交流活動の取組み」として、古市太郎氏（文京学院大学まちづくり研究センター）、日比野勲氏（東洋大学ボランティア支援室）、土居洋平氏（跡見学園女子大学地域交流センター）が登壇し、各大学の教職員側の取組みについての報告がなされました。そこでは、大学を越えた教職員のネットワークの構築、コロナ禍においてつながりを維持するための教職員側のさまざまな試み、コロナ禍で失われた「学生生活」を取り戻すための試みなどが報告されています。

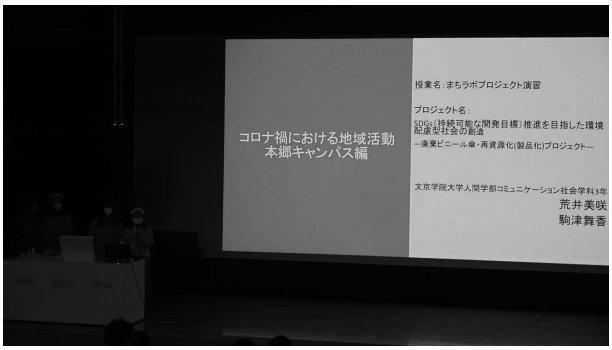
続いて「第2部 大学に求めること―活動の担い手に聞く―」では、跡見学園女子大学、拓殖大学、中央大学、東洋大学、文京学院大学の学生たちにより15の取組みについての報告がなされています。そこでは、文京区のコミュニティバス「B-ぐる」の車内で放映される映像制作プロジェクトがコロナ禍でどのように行われてきたのかという報告や、ふじみ野市と文京区に活動拠点を持つ学生たちがそれぞれの地域ごとの課題やその対応について具体的な報告がなされた。その他にも、茗荷谷地域の食品ロスを減らそうというエシカル消費をテーマとした活動、地域のなかに多世代の人々がくつろげるサード・プレイスをつくろうというプロジェクトである「氷川下つゆくさ荘」の活動など、近年、社会的にも注目されている地域課題と向き合う取組みも報告されました。さらには、コロナ禍でつながりをいかに維持することが可能なのかと挑戦してきた活動、コロナ禍をくぐり抜けてどのような「再開」が計画されているのか、今よりももっとボランティアが応援される社会がどうやったら実現するのかというパースペクティブを持った取組みも報告されました。

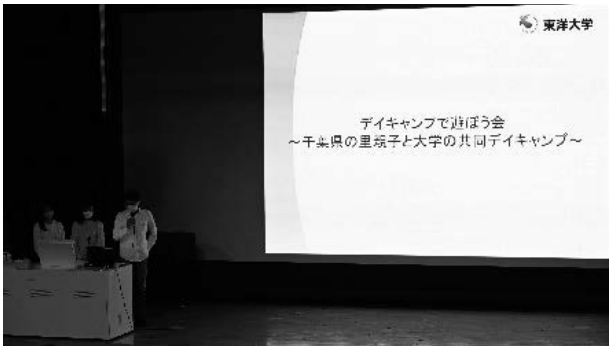
本書は、コロナ禍のさまざまな地域交流活動の現場からの報告を収めたもので、その内容に触れることでさまざまな現場にあるアクチュアリティに触れることができるものとなっています。コロナ禍のさまざまなアクチュアリティとパースペクティブは、これからのウィズコロナ、アフターコロナを考える際の大切な糧となるでしょう。この場を借り、改めて登壇者、聴衆のみなさまに謝意を表したいと思います。

シンポジウム当日の様子









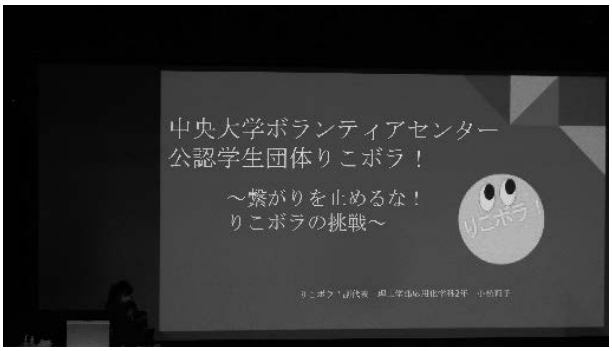
2021年度学生チャレンジ企画
「地域の食品ロスを減らそう！」
FWR（Food Waste Reduction）
拓殖大学

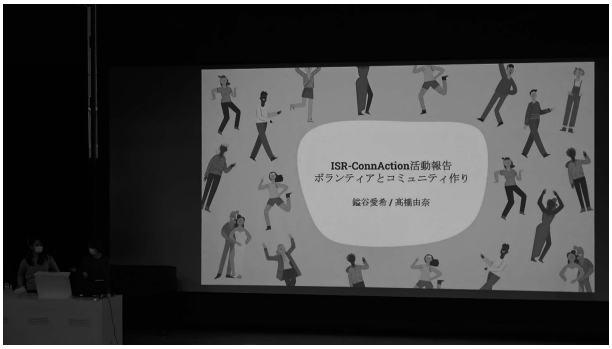
野菜の食育活動
跡見学園女子大学
石渡ゼミ

熱中症啓発活動
跡見学園女子大学
石渡ゼミ

コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性
学生団体TIPSの活動紹介
髙橋 由奈・小山田 萌佳

コロナ禍の
スタート


中央大学ボランティアセンター
公認学生団体りこボラ！
～繋がりを止めるな！
りこボラの挑戦～
りこボラ


ISR-ConnAction活動報告
ボランティアとコミュニティ作り
益谷愛希 / 髙橋由奈

今よりももっと
ボランティアが応援される社会
東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ　渡邊栄都・杉本昂輝

Leaving No One Behind
2019.2.11
文京
まちたいけ
FES
跡見学園女子大学
井上・金・佐野

検温
コメントボード

開会宣言

跡見学園女子大学地域交流センター長
土居洋平

（オタマトーンでジングルベル演奏）

メリークリスマス！ 皆さん、跡見学園女子大学へようこそ。今、オタマトーンで演奏させてもらいました。これはおふざけではあるんですが、そうではない、真面目な意味もあります。というのも、現在、みんなで声を合わせるのはむずかしい。こんな時にですね、もし皆さんが、これを持っているとですね、一緒に盛り上げれる、そんなグッズですね。1個2000円くらいです。

そんなわけで、今日はですね、「コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性」というシンポジウムを開催したいと思います。コロナ禍の間、各大学ではいろいろな工夫をされてきて、今に至っていると思います。今日はそうした各大学の試行錯誤の成果、知恵をですね、クリスマスプレゼントとして共有していただければと思っています。短い時間ではございますが、どうぞよろしくお願いいたします。申し遅れました、私は跡見学園女子大学地域交流センター長の土居と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会宣言の様子

では、開会にあたりまして跡見学園女子大学学長の笠原清志よりご挨拶を申し上げます。笠原先生よろしくお願いします。

（本稿は、2021年12月25日開催シンポジウムの録音データをもとに作成した）

開会の挨拶

跡見学園女子大学学長
笠原清志

ご紹介いただきました、跡見学園女子大学の学長の笠原でございます。今日は跡見学園女子大学までご足労いただきましてありがとうございました。冒頭のアナウンスにもありましたが、この2年間、コロナ感染拡大で大学のみならず日本社会、そして世界が大混乱に陥っております。跡見学園女子大学でも授業をオンラインに切り替え、インターシップ、課外活動、海外研修、留学と言ったあらゆる諸活動を中止、あるいは延期してこのコロナ感染拡大に対応してきました。

コロナの問題については「どのように対応するか」といった議論も必要ですが、今後は社会システム、そして文明史的な視点からの議論も必要であると思っています。つまり、黙食の励行、ソーシャルディスタンスの保持、会議のオンライン化、不必要な外出や出張の抑制、そして海外旅行の事実上の禁止といったことは、人と人との接触と出会いの機会、あるいは場というものを自ら抑制し、あるいは否定していく傾向を持っています。人との出会いが人生を切り拓くきっかけとなったり、また新しい文化や文明を創り出すきっかけも、その多くが異質な他者との接触と交流の中から生まれてきました。本学の教育においては、対面授業というのが教育の本質だと思っております。それは授業を通じて先生と学生との人格的な交流の存在、また授業を通じて学生同士のネットワークの形成が、卒業後も自分たちの財産になっていくからです。

他方でSNSやオンラインの普及は、新しいタイプのコミュニケーションや会議形態が可能であるということを認識させてくれました。「場所を越えた同時性」「いつも他者とつながっていられる安心感」「自宅から会社の会議に参加できる利便性」「地方に住みながら東京の会社に勤められる快適さ」「本社を東京に置かなくてもそれほど困らない経済性」と

開会の挨拶の様子

いったように、その新しい価値と可能性は計り知れません。私たちはこの対面とオンラインを組み合わせることによって、新しいコミュニケーション、新しい人と人との出会いの場をつくり、それを通じて文化や社会を想像しなければならない局面に到達したのではないかと思っております。

現在進行している事態は、10数年後には、私たちの人間関係と社会構造をさらに大きく変化させる可能性があると思います。今回、この「コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性」といったシンポジウムは、それぞれの大学が試みている地域交流活動、そういったものを検証することによって、我々が到達した現在点を確認するものであると思います。

今回のシンポジウムは、各種のコロナ対策を行った上で開催しております。関係者の皆様に感謝いたします。今日のこのシンポジウムが成功裡に終わることを祈念して、私の挨拶としたいと思います。ありがとうございました。

（本稿は、2021年12月25日開催シンポジウムの録音データをもとに作成した）

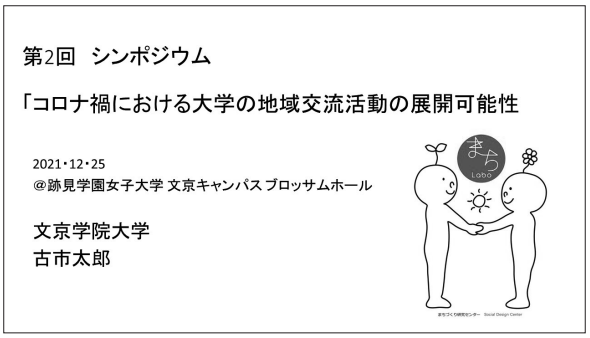
第 1 部

2020年以降の
各大学の地域交流活動の取組み

地域連携のあり方：
学生のwantsと地域のneedsの組み合わせ

文京学院大学まちづくり研究センター長
古市太郎

はい、はじめましての方も、ではない方もこんにちは。古市太郎です。よろしくお願いいたします。若干戸惑っています。先ほど土居先生が僕のお茶らけっぷりにのってきてくださいということでのろう思ったら、笠原先生の重厚なあいさつがあって（会場から笑声）、どうすりゃいいのかなっていうのが僕の率直な気持ちです（会場から笑声）。その真ん中行って、程よい形で報告できればなと思っておりますので、今日は皆さん、10分間しか時間がありませんが、どうぞよろしくお願いいたします。



当日スライド①

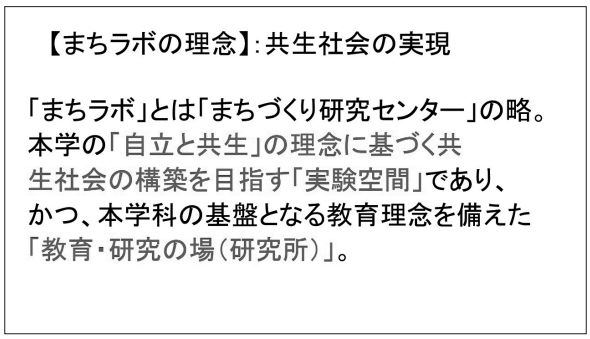
僕の仕事の今日の10分のお話の内容というのは、跡見さんに地域交流センターがあるようにですね、本学にも「まちづくり研究センター」、通称「まちラボ」っていいます、そのお話ができればなと思っております。

もう二つ目は、大学生の皆さん、1年半大変だったと思いますが、教職員の方もこのコロナにおいてどうやってもがいていたかという軌跡みたいなものを、皆さんにご報告できればなと思っております。

今日のアウトラインは、一つ目、まちラボについてと、二つ目、大学関係者の取り組みについてお話できたらと思っております。特に一個一個笑いのネタがあるわけではないので、期待しないでください（会場から笑声）。ちゃんと報告していきますので。

当日スライド②

まちラボというのは、本学の理念に自立と共生に基づく共生社会をつくっていこうというのがありますが、こういった理念を体現する、形に現す場所が必要ではないだろうかということで、まちラボを4年前につくらせてもらいました。



当日スライド③

二つのまちラボってありますが、これは跡見さんと共通項で本学も2キャンパス制を設けています。1、2年生が埼玉県のふじみ野市、後で学生

の方から報告あると思います。3、4年生がまちラボ本郷、文京区にあります。ですから、キャンパス間を跨いだ形で、どうやって連動した取組みをしているのかなっていうことを頭に入れて、学生の報告を聞いてくれるとありがたいです。

【ふたつのまちラボ】

（1）まちラボふじみ野
（埼玉県ふじみ野市・ふじみ野キャンパス）

（2）まちラボ本郷
（東京都文京区・本郷キャンパス）

当日スライド④

まちラボの目的でありますが、社会問題の解決をめざしましょうというのが大きな目的です。まあ、ソーシャルディスタンスって僕等も使っていますが社会的距離、不平等と格差、ちょっと重いテーマなんですけどもそういったものに対して、産官学みたいにありますけども企業さん、行政さん、学生さん、そして地域の方々、ボランティアの方たちと取り組んで、こういった社会問題なんかに取り組んでいこうというのがまちラボの大きな目的となっております。

【まちラボの目的】：社会問題の解決を目指す

とくに社会的「距離・不平等・格差」に対し、共生社会の構築に向けた国内外での社会貢献型プロジェクトの企画・運営を、学生主体の下、「産官学民」の体制から取り組み、成果を社会に還元していく。

当日スライド⑤

まちラボについては、なにか大きな物事を解決していこうというのもありますが、基本的には教育機関ですので、学生にこういった社会経験を積ませる、成長させる場所と考えています。ですから、ここに書いてあるように、学生、教員、地域、企業の方のハブ、中継地点になればいいかなと思ってつくらせてもらっています。文京区には地域連携ステーションフミコムってありますが、そのフミコムをつくった時のですね、モデルとかイメージを持ってですねこのまちラボをつくらせてもらってますので、フミコムをいい感じに真似っこしてつくってるんだなと思っていただけるとありがたいです。

【まちラボの位置づけ】：結節点(ハブ)

主に、まちラボでは学生を「地域社会」および「企業」等と連携させ、社会経験を積ませ成長させる。

→まちラボという場所は、学生・教員・地域・企業の「結節点(ハブ)」あるいは「学生にとっては地域社会への窓口」という位置づけ。

当日スライド⑥

絵で描くとこんな感じです。皆さんも大学の授業とかで授業の後はこうやって絵にするとわかりやすいですよって、多分レクチャーされていると思いますので、僕もこんな風にしてみました。こんな形でまちラボがあります。

当日スライド⑦

まあ要するにまちラボは、社会というさまざまな人々の集まりのなかで人と人とをつなげて、人と問題をつなげて、問題の解決の仕方を示すものです。

要するに・・・

・「まちラボ」では、

「社会という様々な人びとの集まりの中」で、
1.「人と人をつなげ」、
2.「人と問題をつなげ」、
3.「問題の解決の仕方」を示す

当日スライド⑧

恐らく皆さん、これは抽象的で、そんなんわかっとるわいという形になると思うのですが、恐らくこの抽象的なことをどうやって地域に落とし込むのかが、今日の皆さんの後半からの報告になると思います。繰り返しますけども、これはもう誰でも言えることです。僕だけじゃなくてね。これをどうやって地域に落とし込んでいくかってところがですね、今日の皆さんの報告のおもしろいところになるかと思われます。

今のところ一個も笑うところがないので、はい、ごめんなさいね（会場から笑声）。まちラボはコロナ前はこんなことをやっていました。それぞれプロジェクトがあって、メディア系から郊外系、教育系、環境系。僕は居場所の係なのでどうやって地域食堂しましょうって、コロナ前ならできました。その画像を見せたいと思います。

まちラボ本郷・まちラボプロジェクト演習(2019年度)

1. 根向駄山（ねこっちさん）ビデオ通信「文京Deepな人」
2. 郊外団地・商店街における共生空間づくり
3. 若者支援を通じた地域づくり
4. ビニール傘回収・再資源化プロジェクト
5. 携帯電話の回収・レアメタルリサイクルプロジェクト
6. 食を通じたコミュニティづくり（ほっこり広場）

当日スライド⑨

こんな形ですね。地域食堂したいと思っても、なかなか難しいです。最初はこの時の会は、子ども食堂にしましょうって思っていました。向丘地区って南北線で東大前駅にありますが、子ども食堂で一回企画をして集めてみたら、結局どんなことがわかったかという、向丘地区ってなかなか子どもって集まってくれなかった。高齢者、しかも、独居の女性。旦那さんが先に亡くなられた、悠々自適で暮らしている方がいらっしゃっており、結構こういう高齢の女性が集まることがわかりました。そこで、子ども食堂というよりも地域食堂の方がneedsに合っているか、そこから「地域食堂ほっこり広場」という名前で地域の方と活動してきました。コロナの前ね。こんな形で地域の方のneedsと学生がしたいことをすり合わせする会を何度か開きました。

僕が今お話ししたのはコロナの前だったので、

スライド⑩⑪⑫⑬⑭

コロナ禍におけるまちラボふじみ野の活動と、まちラボ本郷の活動については後の学生の報告を聞いてください。

コロナ禍における

まちラボふじみ野（埼玉県ふじみ野市・ふじみ野キャンパス）

まちラボ本郷（東京都文京区・本郷キャンパス）

活動内容については、後の学生の報告を！

スライド⑮

大学関係者の2021年度の取り組み。

「学生支援担当者連絡会」（通称：地域ニーズの会）を発足！

文京学院大学から「地域連携ステーション」への相談がきっかけとなり、コロナ禍で学生と地域との連携における形も変わる中、区内の大学の学生支援の取り組み内容と実施体制を伺う機会として「学生支援担当者連絡会」を2021年４月から毎月行ってきた。

これまでに文京学院大学、東洋大学、跡見学園女子大学、東京大学、拓殖大学、日本女子大学、中央大学の取り組みを伺いながら、お互いの情報交換を行ってきました。

日時	開催校・場所	参加大学数（人数） オンライン含む
4月26日	文京学院大学	3大学（８名）
5月24日	東洋大学	5大学（12名）
6月21日	跡見学園女子大学／旧伊勢屋質店	4大学（10名）
7月26日	拓殖大学	5大学（16名）
9月28日	日本女子大学	7大学（18名）
10月26日	ワークスペースさきちゃんち	6大学（11名）
11月22日	文京学院大学・まちラボ	6大学（11名）
12月25日	跡見学園女子大学／ブロッサムホール	シンポジウム

スライド⑯⑰

本当に一個も笑うところがない。コロナにおいて学生さんはフィールドとか学外出ることができなかったんですけども、それは教職員も一緒です。そこで、2021年3月に、まあ発起人、言い出しっぺは僕だったんですけども、今日もコメンテーターをしてくれている田邊さんのところに、「ちょっと教職員間でフットワークの軽い方たちを集めて、なにか今模索している段階の話をできないか」ということで田邊さんに相談しました。僕のその時の条件が、恐らくここに4大学、5大学の方がいらっしゃると思うんですけども、学生同士でも他大学生と話すのってなかなか垣根があると思います、難しい、ましてや大学となるとルールが違い、すごく難しいです。フットワークが軽くて、学生の目線でフィールドとかボランティア活動を考えているような教職員の方を集めてくださいということで、東洋さん、跡見さん、東大さん、拓大さん、日本女子大学の方々たちとですね、取組みをうかがいながら、3、4、5、6、7、8月とずっと打ち合わせをしてきました。

4月26日から始まって、今日まで跡見さんのシンポジウムまでたどり着いたわけですけども、本当に土居さん、新垣さん、事務職員の中村さん、本当にありがとうございます。こういう形でこれまで進めてきました。こんな場面が、これが先ほどもお話したまちラボで、手前にいるのが土居先生と新垣先生でしょうか。東洋さんも、オンラインと対面の形でミーティングをして。次は拓殖大で密室ですね。で、日本女子大さん、急に開放感。拓大さんをいじると。密室で。開放感で（会場より笑声）。大網さん、関口さん、藤村さんごめんなさい、いじっちゃって。もう一回見ましょうか、密室で、開放感（会場より笑声）。一個くらい笑いをとらないとね、じゃあ、次にいきましょう。そして、日本女子大さん。キャンパスが新しく移転されたということで案内していただきました。

この後は、一通り大学を回って、拓殖さんとか跡見さんがいかれている「さきちゃんち」っていう居場所です。文京区は、7つから9つの居場所があります。最初にできたのは「こまじいのうち」という駒込にある、古民家を活かした形の地域の居場所があります。一通り抽象的なことはわかったけども、地域の現場にどうやって落とし込むかっていったときに、現場の方たちに話を聞くためにワークスペース「さきちゃんち」へ出向いたわけです。

あと僕の時間は1分半ですね。では、まとめです。これは恐らく次の日比野さんとつながってくると思うんですけども、地域連携の在り方ってなにかと言いますと、基本は地域の実情に合わせることが僕はベターだと思います。で、学生さん、もしくは地域の強みを活かして弱みを補うような連携が求められると思います。こちらの絵がありますが、学生さんが「これしたい」「この活動したい」というwantsです。地域は「こういうことしてもらいたい」というneedsがあるわけですね、「企業さんこうしてもらいたい」。よくあるパターンで連携が失敗するのが、下のwantsが多い時です。学生の「こんなことしたいんです」って、地

@文京学院大学

@東洋大学

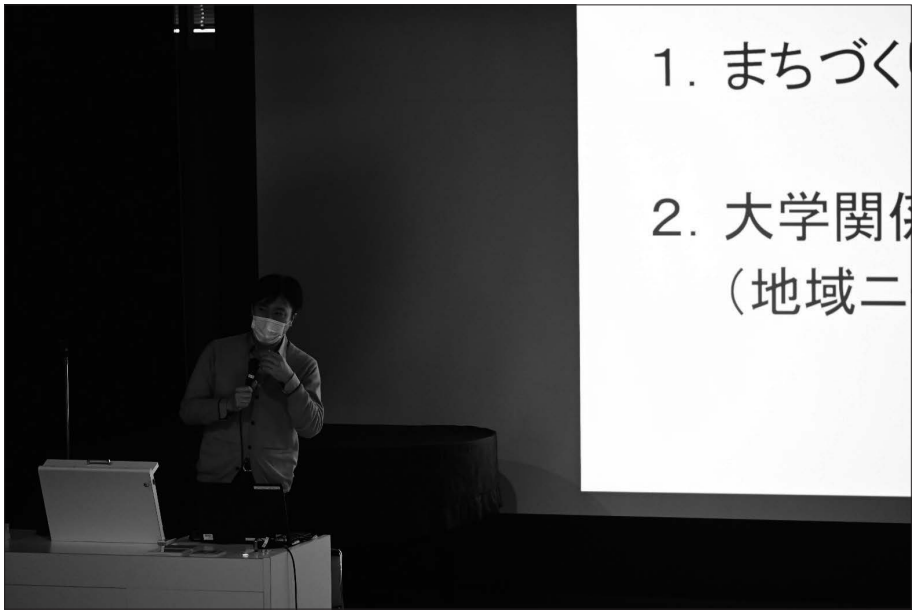
@拓殖大学

@日本女子大学

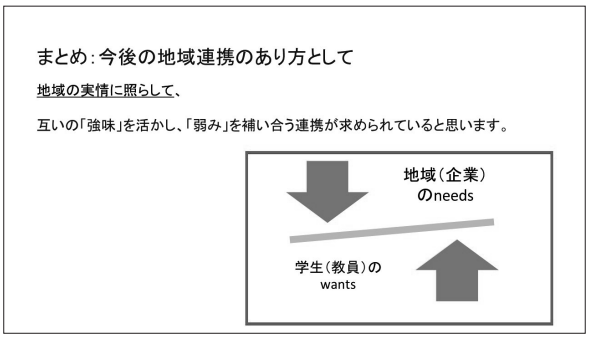
@ワークスペース
さきちゃんち

スライド⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔

域の方からすると、僕10年くらいやっていますが、一言でいうと「知ったこっちゃない」んですよ学生の活動って。地域には地域のneedsがある、この温度差の調整が必要だと思っています。地域のneedsと学生のしたいこと、ここがちょうどうまくいくと、地域連携がうまくいくのかなと思っています。恐らくこのバランスがうまくいっている活動を、この後、学生の皆さんが報告されるのかと思います。それを僕、楽しみに聞いていますので、最初トップバッターの古市としては、地域連携の在り方は地域の実情に照らすということ、needsとwantsのバランスが非常に大事かと思います。



報告の様子



スライド㉕

ちょっとでも頭にこれが入っていると成功かと思います。成功のポイントは一点です。大体これをいうと、「じゃあ、先生が言ったことを僕忘れません」っていってくれます。本当うれしいのですが、今日、お風呂かシャワーを浴びた後ですね、それでも覚えていたら僕のこの報告は成功です。きれいさっぱり忘れたらですね、もう知らない。こんな話をすると、だいたい小学生の子どもは「僕、先生ね、大丈夫」っていう、「なんで？」っていうと「僕、今日お風呂入んない」ってね（会場から笑声）。

では、最後にオチがついたかわかりませんけども、二番バッターの日比野さんにバトンを渡したいと思います。皆さん、ご清聴ありがとうございました（会場から拍手）。

（本稿は、2021年12月25日開催シンポジウムの録音データをもとに作成した）

コロナ禍の中の東洋大学ボランティア支援室
～リアル課外活動が停止した状況の中で～

東洋大学ボランティア支援室 ボランティアコーディネーター
日比野　勲

皆さんこんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、東洋大学ボランティア支援室でボランティアコーディネーターをしています、日比野と申します。先ほど古市先生の報告スライドにも出てきましたが、私たちは文京区内の大学教職員の皆さんで、おおむね月1回程度集まりをもってきて、お互い意見交換とか情報交換し合いながら、それぞれどんなことをやっているのか、どんなことで悩んでいるんだということで交流してきたんですが、先ほどのスライドをみてですね、東洋大学で意見交換をしたのが5月だったんだということにちょっとびっくりしてしまいました。あっという間に1年が経ってしまうんだなということを思い浮かべながら、今日はクリスマスで、あっという間に2022年を迎えるということになりますが、来年2022年はコロナ禍は続くんでしょうけども、皆さんの笑顔に触れられるそんな一年になったらいいなと願っております。

さて、今回、私がつくってきたスライド、「コロナ禍の中の東洋大学ボランティア支援室～リアル課外活動が停止した状況の中で～」という風にタイトルを付けさせていただいております。では、お話の方進めさせていただきます。

当日スライド①

少し簡単に私自身の自己紹介をしておくと、私は東洋大学ボランティア支援室にボランティアコーディネーターということで着任しております。ボランティアコーディネーターというのは、ボランティア活動をしたいという、（大学のボランティアセンターであれば）学生さんの相談にのったり、地域の皆さんがどんなことにお困りなのか、地域で学生さん来てほしいんだけどどういう風にして受け入れたらいいのか、そんなことを考えていきながらいろんな人たちをつないでいったりということに特化した専門職員という立場になっております。

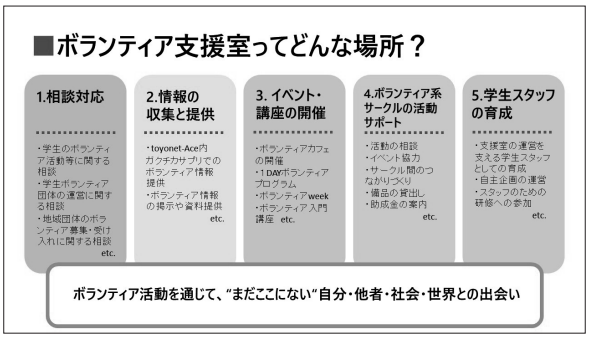
当日スライド②

ボランティア支援室はこのように道に面したところにありますので、白山の辺りに来られる際にはちょっとご覧いただいていただけるといいかなと思います。いずれまた皆さんをお迎えできればなと思っております。

ボランティア支援室がどんな場所かというのは、ここに書いている通りではあるんですけれども、先ほどのお話と照らしあわせていきますと、私たちボランティア支援室や、それから他の大学であればボランティアセンターだとかボランティア支援センター、そんな名称が付いているところがあります

当日スライド③④

が、いわゆる大学ボランティアセンターという括りになります。この文京区内ですと中央大学さんもボランティアセンターをお持ちになっています。日本全国に大学ボランティアセンターは概ね170キャンパスほどあるといわれていますけども、東洋大学もその一つということになっております。自分自身であったり、他者であったり、社会や世界であったり、出会いを通じて自らの世界も広がっていく、そして自分ごとが広がっていく、そんなことをサポートする場所だと思っていただければと思います。



当日スライド⑤

今日は後ほど発表があるので、譲ろうかなと思いますけども、2019年度から学生サポートスタッフということでボランティアの魅力を発信するといったことにかかわってくれているスタッフの育成ということも行っております。

当日スライド⑥

コロナ禍の前、2019年度までの取組みは、簡単に写真で紹介するに留めます。こうやって一日体験型のプログラムを展開したり、あとはボランティアカフェといって、お茶とかお菓子を囲みながら気軽にボランティアなどの話をしたりという企画をやっていました。ちなみにボランティアカフェは、コロナの前から東洋大学の学生の方のみならず他大学の皆さんもお招きしてということでやっていました。

当日スライド⑦

他にも、こういった社会見学的なプログラムを行ったり、あとは大学のボランティアセンターですと大規模災害があった時などに被災地支援ということで活動が起こってくる場面があるのでそういったことも行ったりしています。

一つこの場で紹介すると、西日本豪雨があった時に被災地支援の活動をやりたいという学生さんに、活動に行く前に事前研修ということで防災教育コンサルタントの方をお呼びして本学で講座を行ったんですけれども、中央大学でも被災地支援活動に参加を希望する学生さんは、本学で行ったものと同内容の研修の受講が必須となっていました。しかし、中央大学はメインのキャンパスが八王子にあり、ボランティアセンターはそちらにしかなく、理工学部のある文京区のキャンパス

にはボランティアセンターがありません。そのため、中央大学の研修は八王子で開催されるということになり、理工学部の学生さんも八王子に行かなければならない状況でしたが、それならばということで、私たち東洋大学で行う文京区での研修を、中央大学さんの被災地支援活動に参加するための資格に認定できるようにしましょうということで、これも中央大学のコーディネーターさんと相談してそういった調整を行うなど、こういったことも大学間で協力し合うことができた事例かなと思います。

当日スライド⑧⑨⑩⑪

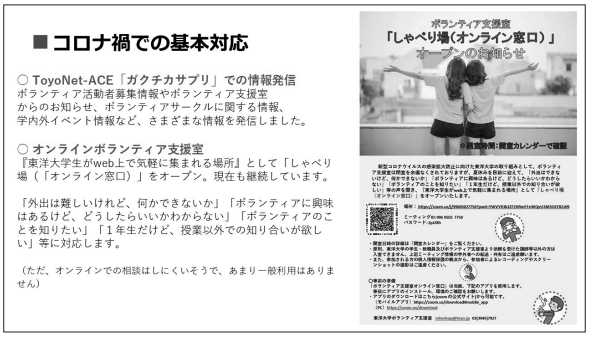
ということで、このあたりのところは今日の会場の入口のところで資料を配布しておりますので、そちらをご覧いただければと思います。

2020年、コロナショックがやってきました。東洋大学は、恐らく他の大学の皆さんと比べると課外活動の制限が厳しく、対面で行う課外活動に関しては、いわゆる第5波が収束するまでの間、基本的にはできませんでした。ボランティア活動も、東洋大学の場合、私たちのボランティア支援室で対象としている活動はすべて課外活動ということになるので、これらはすべて停止という状況になりました。それで、我々の取組みもすべてオンラインに移行することを余儀なくされました。

当日スライド⑫

基本的な対応としてどんなことを行っていたかといいますと、皆さまの大学にもあると思いますが、私たちの大学にもポータルサイトのようなものを持っています。そこに、ボランティア活動や地域活動情報を掲載しているところがあり、そこに情報を載せるということと、それからンラインボランティア支援室ということで、Zoom上で毎日10時半から15時半までZoomを開けっ放しにして、そこにいつでも相談に来ていいよということをやっていました。まあ、とはいってもなかなかオンラインでの相談というのはいきなりはしにくいので、なかなか利用には結びつかないことも多かったですけども、こういう場を準備しておいて、必要とする人が来た時に使えるようにということは行っていました。

コロナ禍での主な取組みとしては、既に行っていたプログラムでオンライン化できるものをすべてオンライン化してきました。サークルの合同説

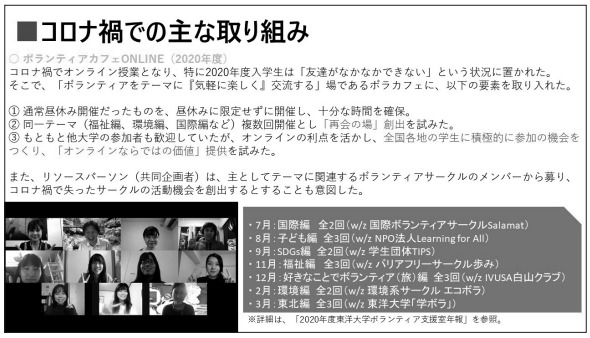


当日スライド⑬

明会や、ボランティアカフェもオンラインにするということを行ってきました。それからボランティア体験プログラムもオンライン化がようやくできたものがあるという形になっています。

当日スライド⑭

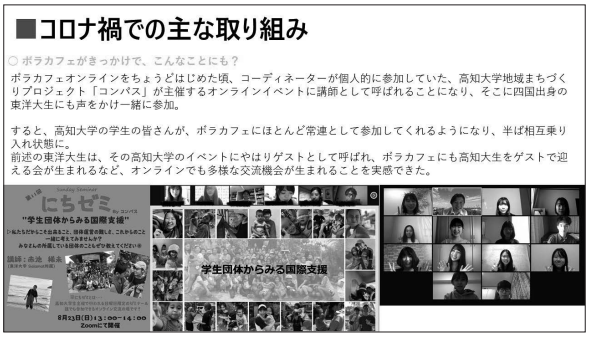
そのなかの一つ、ボランティアカフェのオンライン化について、特に私たちがコロナ禍のなかで着目したのが2020年度、今の大学2年生の代ですけども、オンライン授業で友達が全然できない、サークルにも入りそびれるという状況があって、そんな状況のなかでボランティアカフェを少しでもそういう場にできたらいいなということで、元々気軽に楽しくお茶とかお菓子を食べながら交流しようという場なのでここにいくつかの要素を加えてみました。まず、ボランティアカフェは元々お昼休みにちょっと寄って参加できるという性質のものだったんですけども、オンライン授業ですとオンデマンドなど、その時間に受けなくてもよいという授業も多かったということから、昼休みに限定せずにたっぷり時間をとって行うようにしたということが一つです。それから例えば、福祉だとか環境だとか分野ごとにテーマを設定して、それを2、3回連続開催にしたんですよね。これは再会の場をつくるということで、同じテーマであれば2回目でもう一度会えると、やはり人間一度会うよりも二度目の出会いというのはすごく違ってくるもので、そういったことによって友達づくりだとか仲間づくりってことにつながるような、オンラインでもそういった場所は決してできなくないよねってことにこだわってつくりました。さらに、元々他の大学の皆さんもどうぞということでやっていたんですけども、このオンラインの利点を活かして、もうこうなったら日本全国、例えばゲストで学生の皆さんに事例発表してもらう時に北海道とか四国とかそういったところからもゲストを積極的に呼んだりして、外に出られないながらも新たな世界が広がっていく。このようにオンラインならではの積極的に価値を打ち出していくことを試みました。他にも、一緒に企画を立ててくれる学生さんを立てたりするんですけど、それをボランティアサークルの人から選び、なかなかサークルも活動ができなくなっている状況のなかで活動創出の機会としても位置付けるということに取り組んできました。



当日スライド⑮

そして、こんなことをしていると遠くの高知大学からボランティアカフェに参加してくれて、それがきっかけとなり、また今度は高知大学の方でやる企画にうちの学生がゲストで呼ばれていったというような展開をしていくなど、オンラインでも多様な交流機会が生み出せるんだということを実感できた一例かなと思います。

他にもこうやって海外のフィリピンの同世代の若者を中心にSDGsについて、英語を使ってディスカッションしていくというボランティアプログラムを4日間やりました。1日で終わるというよりも、やはり4日間共にするということで関係性にいろ



当日スライド⑯

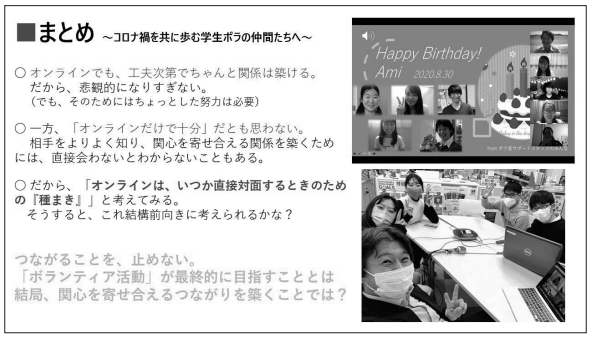
いろ変化が出てきて、4日間共にしたメンバーのなかから学生スタッフが3人迎え入れることができ、そういったことにもつながっていくんだなと実感しました。

当日スライド⑰

また、ボランティア入門講座や、1年生の授業に私や学生スタッフが出向いていって、ボランティアの種をまくということを、歩みを止めずにきたのかなと思います。

当日スライド⑱

ということで最後まとめに入ろうかと思うんですけど、このコロナ禍のなかでは皆さんとお話しするなかで、他の大学の皆さんそれぞれいろんな苦労があったのかなと思います。そんな学生ボラの仲間たちへというサブタイトルを付けて皆さんにメッセージ的なことをお話しすると、オンラインでも工夫次第でちゃんと関係をつくれるということ、それを本当に実感しました。だから悲観的になりすぎなくてもいいのかなと。だけど、そのためにはちょっと努力が必要。ちょっと踏み込んだり、関係性を維持する努力も必要だったりするかなと思います。だけれども一方で、オンラインだけで十分だとも思わない。楽だから、オンラインだけでいいやとなりがちになるので、やっぱり相手をよく知って関心を寄せあえる関係は直接会わないとわからないこともあるのなかと思います。だから、コロナ禍のなかで出てきたオンラインという新しい選択肢は、いつか直接対面するときのための種まき、関係性の種まきだなと考えている。そうするともし万が一残念ながらコロナの感染が拡大してしまったとしても、前向きになれるんじゃないかと思います。結局、ボランティア活動や地域交流活動というのは、関心を寄せあえるつながりをつくること、それが最終的にめざすところなのかなと私は思っています。



当日スライド⑲

本日は会場でボランティア支援室の年報を配布しておりますし、電子版もありますので、後ほど是非見てみてください。時間もオーバーしてしまいそうなので、お話はここまでにしたいと思います、どうもありがとうございました（会場から拍手）。

（本稿は、2021年12月25日開催シンポジウムの録音データをもとに作成した）

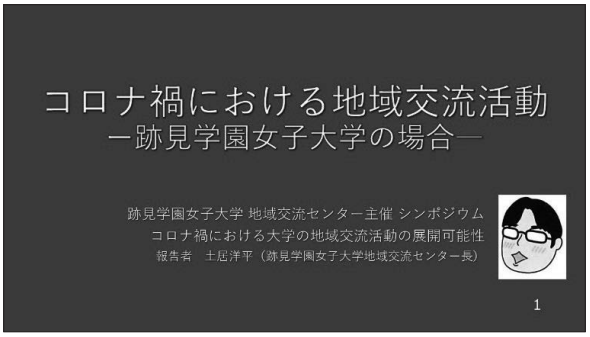
当日スライド⑳㉑

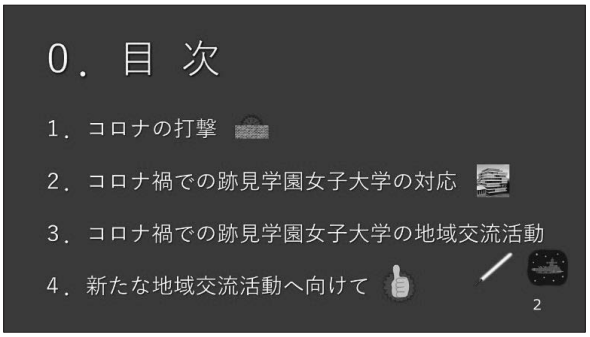
報告の様子

コロナ禍における地域交流活動
―跡見学園女子大学の場合―

跡見学園女子大学地域交流センター長
土居洋平

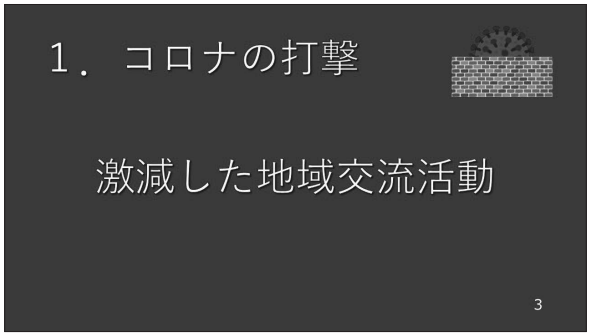
私の方からは跡見学園女子大学の話をしたいと思います。私も所属している跡見学園女子大学地域交流センターは、2019年に現在の形となりました。それで、いよいよ本学も地域交流活動を本格的にとやろうとしたその年度の最後にですね、コロナ禍に遭うということで、今日はですねそのダメージ、大学の対応、そのなかで進む地域交流活動、そして今後の話をしたいと思います。よろしくお願いします。

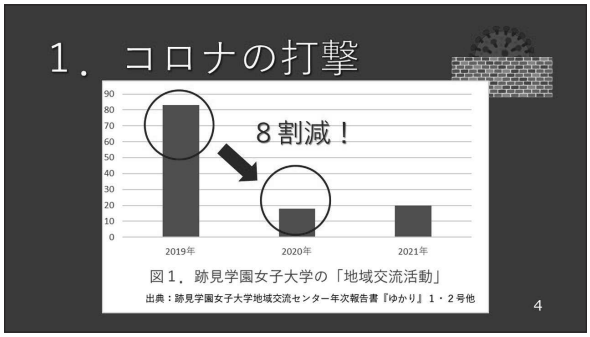




当日スライド①②

まず、コロナ禍の影響ですが、地域交流活動はやはり、ほかの活動に比べて最も強く影響を受けますね。2020年の春学期は、本学でもほとんど地域交流活動できない状態になっておりました。これは、うちの毎年出している「ゆかり」という報告書ですが、これはホームページからダウンロードできますのでよかったらあとでご覧いただければと思うんですけど、そこにですね、学内の地域交流活動がどれだけあるかを毎年載せています。これを見てください、2019年と比べて2020年は、なんと8割減ですね。2020年最後までやり切って、それでも8割減という大変危機的な状況でした。それで、どんな活動がなくなっているのかというとですね、まず、遠くに行けなくなりました。私は元々、跡見に来る前、山形の大学に勤めていたこともあって、コロナの前は月1回のペースで山形へ学生を連れて行っていたんですね。まあ、文京区内でも新座市内でもいろいろ活動していますが、特に山形にいくの部分がですね、現在に至るまでできていません。

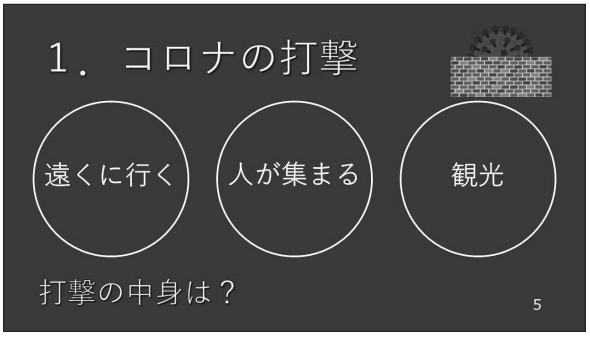




当日スライド③④

それだけじゃなくて文京区内もですね、もちろん再開している活動もいろいろありますが、人を集めてイベントをする、特に飲食の伴うようななかなか再開できていない。これが、もどかしいんですね。私は山形のお世話になっている地域から物を仕入れて、こんなこだわりの物がありますよっていうそんな活動もしていたのですが、そのあたりができていない。

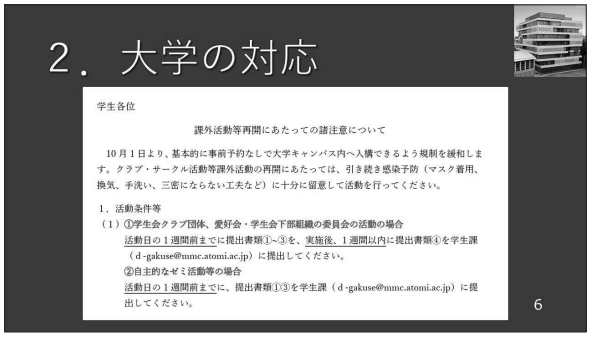
あと、観光関係のものも殆どが中止になりました。これは遠くに行くという話だけではなくて、例えば本学には観光デザイン学科というものがありますが、その学科では東京に来る修学旅行生を案内する、都内の観光案内を学生がするといったことをしていたんですが、そもそも地方から東京に修学旅行になかなか来られないというので、その活動がなくなっています。



当日スライド⑤

こんななかですね、我々もいつまでも手をこまねいてみていたわけではありません。2020年の春学期は、まだ状況がわからない、コロナの正体がわからないので今以上に厳戒態勢でした。当時は、学生がなかなか大学の構内に入らないようにしていました。ですので、地域交流活動どころではなかったわけですが、それが2020年の秋くらいからですね、ようやく学校に一部来られたりですね、あるいはサークルの活動とかを事前に許可を受けてなんとかできるような形にしてきました。それで、地域交流活動もこうした形でなんとなく再開し、2020年の秋頃からですね、コロナとの付き合い方、Withコロナの対策をしながら活動というのがみえてきました。

それで、2021年は4月にサークルの活動、授業の活動という括りを越えて、教室外の活動全般に



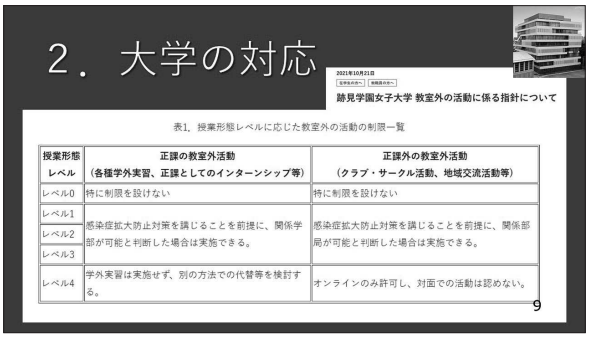
当日スライド⑥

対してですね、決まり事をつくって、感染の状況をみてこれくらい、こういう時はこんなことをできるというようなルールをつくりました。これで体制としては整ったという風に思っていたんですが、この後もですね、いろいろ難しいことがありました。どういうことかといいますと、ご存知の通り、感染は波を持って繰り返しますよね。この状況で精緻にこれくらいの感染状況だとこれができるっていう風にやっているとですね、この波は結果としてここで落ちるということは後でわかりますけど、その時その時はわからないですから、ある時点で規制を強めたりするとですね、「あれっ」といううちに感染が収束する。でも、まだ油断できないと様子をみているうちにですね、この強い規制のまま来てしまう。それで、「あっ大丈夫なんだな」って規制を緩めると、また感染が拡大するということもあるわけでして、この適切なタイミングで手綱を引くっていうのが大変難しかったんですね。

当日スライド⑦

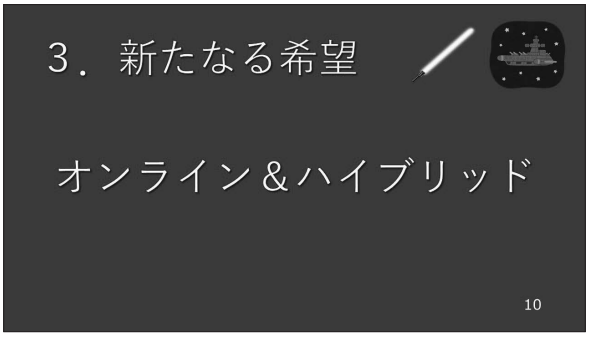
ですので、2021年10月21日以降は、コロナがものすごい感染状態になっている以外は、基本は教室外の活動は同じレベルでできるようにしました。2021年の秋頃にはですね、我々もコロナとの

つきあい方が大体みえてきた。それで、きちんと感染対策をしていけば、多少の感染の収束・拡大に関わらず活動できるのではないかということで、感染対策を講じることを前提に、地域交流の活動もできるようにしていきました。



当日スライド⑧⑨

こうした大学の対応と並行しまして、いろいろな学生団体、そして地域の方と一緒に試行錯誤しながら、地域交流活動を再開してきました。もうお話がありましたように、オンラインやハイブリットを駆使して、この間ですね、特に近場での活動は人の集まるもの以外はかなり再開してきたと思います。

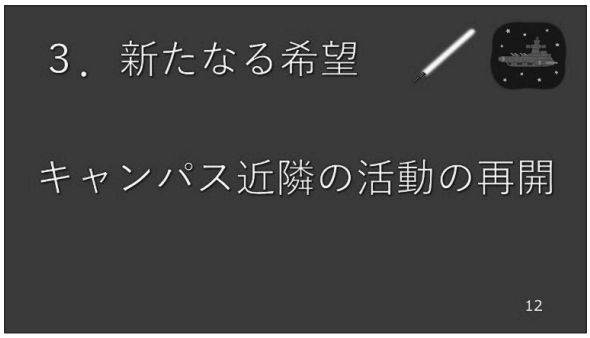


当日スライド⑩

これはあとでお話のあるものですが、竹形さん写っていますね、「まちたいわ」の活動ですね。この場所に集まるのは少人数ですけど、オンラインではたくさん集まる。あるいは、うちも出品した「文京映画祭」などはZoomではなくてclusterというSNSアプリがありますが、それで開催されていました。この形ですと、人がアプリのなかで移動できたりしまして、なんとなく対面に近いような感覚になるんですよね。あるいは、このあとすぐに話のある「B-ぐるバス」の映像撮影の話なんですが、大人数が集まらなくても、3、4人が撮影の場所に集まって、他のメンバーはオンラインでつないで「ああでもない」「こうでもない」とアドバイスをする。いろいろな工夫をしながらですね、キャンパスの近くの活動は再開できるものも多々でてきました。

当日スライド⑪

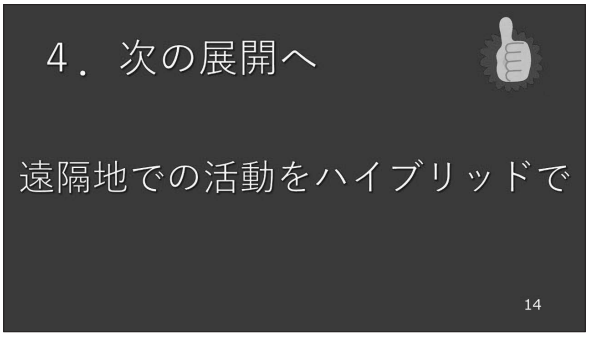
これが今年に入ってからの活動ですね、いろんな居場所とかですね、本学の体育館ですが、このようにやはり少人数でこの距離を取れる場所ですと、できることも増えているような感じがします。ただ、まあ気をつけなくてはならないのがですね、久しぶりに会うとですね大体テンションが上がってですね距離が近くなりがちですね、そのあたりは教員の方でうまくコントロールしてしっかり対策していこうというところです。



当日スライド⑫

当日スライド⑬

また、こうなってくるとですね、オンラインを活かした新しい動きも出てきまして、特に遠くとの活動なんかはですねオンラインを駆使した方が日常的な交流はできたりするわけですね。



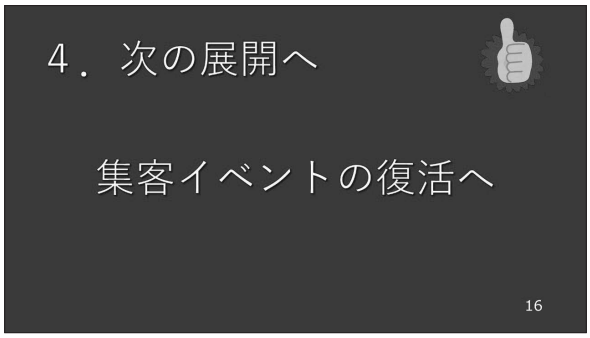
当日スライド⑭

この左上以外の写真が、私が関わっている山形のですねある町のお土産をつくろうというプロジェクトなんですが、オンラインで集まって、あちらの集落の雑誌で紹介してもらって、実際つくった物を売ったりするというようなことをやったりしています。

そうこうするうちに、2021年の秋には感染状況が落ち着いてきました。秋になりまして、私自身は学生を連れて遠くへは行っていないのですが、学内にはですね、北海道とか福島とかに人数を絞って、いろいろな対策をして行ったケースが出てきました。左上が、その活動の写真です。

当日スライド⑮

今日もそうですが、こうした人を集めるようなイベントも少しずつ再開してきました。11月の終わりには、この場所（ブロッサムホール）で「朗読コンテスト」というのを行っているのですが、それは本日と同じぐらいの人が来ました。本学でも100人くらいが集まって、壇上の話を聞くというようなイベントはできるようになってきました。

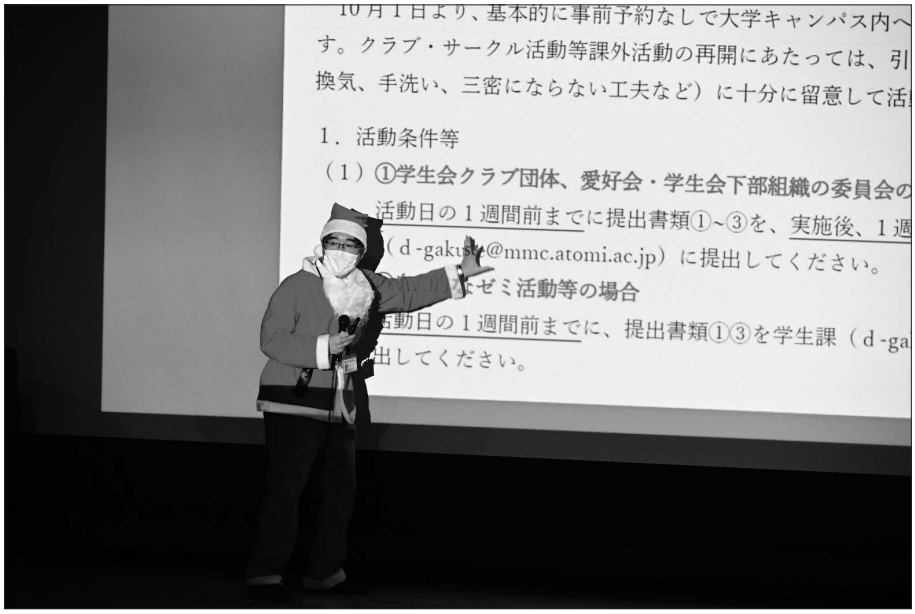


当日スライド⑯

そして、今日の最後に報告がありますが、「文京まちたいわ」という文京区内のまちづくりに関心のある方が集まるイベントがあるんですね。それで、いつもは別の所でお世話になっているのですが、2021年2月11日に本学で開催する予定でして、だんだんワークショップ的にやるようなことも、いろいろな対策を考えて、できるようになりつつあるのかなと思っています。

当日スライド⑰

そして、今後のことなんですが、現在も、たくさんの人が集まって、例えば飲食物を売ったりするようなものとか、遠くに行ってその地域のこうした餅つきのようなものに出たりとかですね、泊りがけでたくさん学生が行きまして、これは学生



報告の様子

が毎年やっていた雪像をつくるなんていうことをやっていたのですが、こうしたものは、なかなか復活していません。現在、なんとかこうしたものも復活できるようにすべく、我々もどういう感染対策が必要で、どういう形だとできるのかについて考えています。

当日スライド⑱

ですので、2022年はですね、この写真のような活動もですね、つまり、よりコロナ前に近いような活動を、感染対策をしっかりしながら実現させたい。そのことによって、失われた学生生活を早く取り戻したいと考えています。もちろん、何年かすれば、コロナ禍は解決するでしょう。でも、ここにもいますが、4年生はこの3月で卒業しちゃうんですよね。今の3年生もですね、大学に入っていざ本格的にと思ったらコロナで、このまま行くと、できたはずのことができないまま卒業してしまう。このあたり大変危機感を持っておりまして、なんとかこの状況でうまく活動できることを考えているということでした。以上で私からの話は終わりにしたいと思います。ありがとうございました（会場から拍手）。

当日スライド⑲

（本稿は、2021年12月25日開催シンポジウムの録音データをもとに作成した）

第 2 部

大学に求めること
―活動の担い手に聞く―

コロナ禍での地域映像制作の取組み
―コミュニティバスB-ぐる車内映像制作プロジェクト活動報告―

跡見学園女子大学
山岸樹璃・釜　菜摘・波多江詩織

●活動概要

「B-ぐる車内映像制作プロジェクト」では「B-ぐる」という文京区内を走る年中無休のコミュニティバスの車内映像を制作する活動を行っている。B-ぐるバスとは2007年に運行を開始した文京区内を走るコミュニティバスで、2021年で14年目を迎える。バスの路線は「千駄木・駒込ルート」「目白台・小日向ルート」という二つの路線に加えて、2021年の9月に「本郷・湯島ルート」の運行が開始された。

この活動ではメンバーをA・B・Cの三つのチームに分け、B-ぐるバス乗車中に楽しんでもらえるような映像の制作活動を一年を通して行っている。また、この活動を進めるにあたっては文京区民課・沿線協議会などの地域の方々にご協力をいただいている。車内映像には文京区内にあるお店や習い事の紹介、日常生活でのお役立ち情報、文京区のクイズなどの文京区にまつわる動画を多く企画しているが、バスの利用客である文京区の方であっても楽しめるように文京区に住んでいてもあまり詳しくは知らないような情報などを集めて企画と映像制作を行っている。

●実際の車内映像の紹介

B-ぐるチャンネル『2021年度／いちようさん／ライバル現る!?の巻』

動画内容：樋口一葉のイメージキャラクターである「いちようさん」が今回で動画初出演のライバル役「かほさん」とケーキをかけてかるたで対決する

学校法人跡見学園が文京区指定有形文化財にも指定されている樋口一葉ゆかりの旧伊勢谷質店（菊坂跡見塾）を取得・保存していることから、樋口一葉とのゆかりがある跡見学園女子大学ではB-ぐるバスの動画のメインキャラクターとして「いちようさん」を登場させている。今回は初の試みとして、この「いちようさん」のライバル役が登場した。勝気な「かほさん」は「いちようさん」に果たし状を送り、ケーキをかけて百人一首の勝負をもちかける。かるたの勝負シーンでは本校のかるた部にも協力を得て、コミカルな映像にしあげた。勝負には負けてしまう「いちようさん」だったが、今後の二人の勝負の行方に目が離せない――。

YouTubeの「B-ぐるチャンネル」でも放映されているいちようさん動画のワンシーン

●コロナ禍における工夫など

コロナ禍での動画の企画は全てリモート会議で行ったため、直接メンバーと会う機会が少なく意思疎通が難しいこともあった。しかし、週に一度会議を開き企画や動画編集の進捗を確認しあう場をつくることで、お互いに励ましあったり助け合っ

左：リモート会議の様子　右：動画編集会議の様子

たりして動画制作を進めていった。会議には沿線協議会や映像制作のプロの方が参加してくださり、毎回貴重なご意見をいただけたので、何度も企画を練り直してB-ぐるバスで放映するものとしてどのような動画が望ましいのかということを改めて考えることができた。全体での会議が終わった後も学生で反省会を行なったりして、非対面でもメンバー同士で協力・連携するための時間を多くとれるように心掛けた。動画撮影ではコロナ対策のためのフェイスシールドなどの感染対策を徹底するなど協力をしていただけるお店や団体の方への配慮がコロナ前とはまた違ったものになった。これからも社会的距離は空けつつも、チームワークは密に頑張って行きたい。

●活動に参加した感想

コロナ禍では難しくなった大学の先輩や後輩などの多世代交流や地域の人とのつながりをつくるきっかけづくりとして、本活動はコロナ禍での新たな人間関係をつくりだしてくれるものとなった。また、映像制作をするうえで文京区というまちについての知識が多く必要になったため、文京区について改めて知ることができた。今後も学生が地域と関われる活動の一つとして長く続けていきたい。

Aチームメンバーの集合写真

B-ぐるバス車内映像製作発表報告 パネル

跡見学園女子大学

B-ぐるバス 車内映像製作

発表報告

本日の プレゼンテーション

- 活動概要について
- 映像の紹介
- コロナ渦における工夫など

B-ぐるバス

文京区コミュニティバス

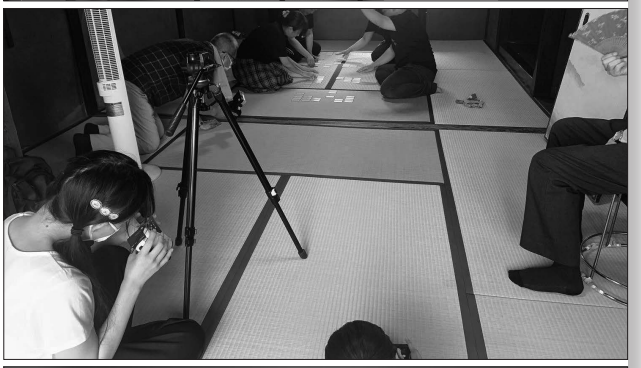
私たちは車内映像を製作してます！

コロナ渦での活動

- リモート会議
- 連絡頻度↑
- 反省会

直接会えなくても…

連携を“密”に



コロナ禍における地域活動：ふじみ野キャンパス編

文京学院大学 人間学部コミュニケーション社会学科3年
近日向子・中舘莉子

まずは、まちづくり研究センター（通称：まちラボ、以下まちラボ）の概略を説明します。まちラボは、産官学民連携による社会問題解決型の研究施設で、より広い視点から社会問題解決に取り組む組織です。そのまちラボは、まちラボふじみ野とまちラボ本郷に分かれています。

まちラボふじみ野の特徴は、授業でもサークルでも委員会でもなく、自主的に地域に出て、自分たちのできること・やりたいことを考え実行できる場だということです。その活動の中で今回紹介したのが、「ぶんぶん」です。「ぶんぶん」とは、地域活性化プロジェクトとして商店街の空き店舗を活用した駄菓子屋「菓子屋 ぶんぶん」のことを指します。学生約17名で運営し、2019年度から約1年間継続して行いました。商店街の方、ふじみ野市役所の方、地域の方々と交流し人の温かさを実感した活動でした。

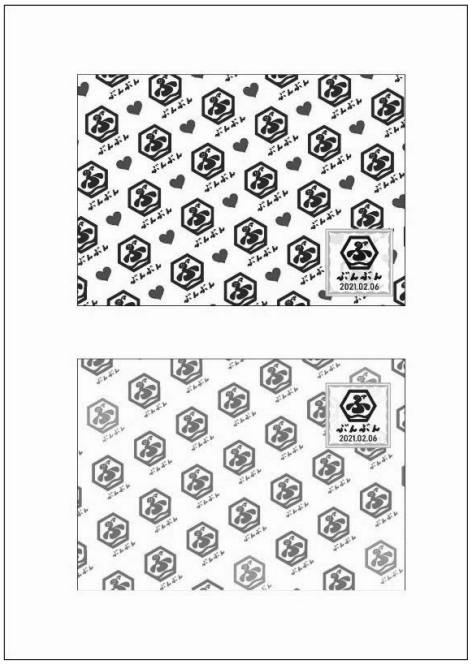
活動が勢いを増すかに見えたなか、世界中がコロナ禍に陥りました。もちろん私たちの活動もその影響下にありました。感染拡大のため、対面で集まることができず、すべての活動に制限がかかりました。私たちはできることを探り、毎週オンラインミーティング実施することにしました。そのミーティングから出た企画が、「オンライン学園祭　駄菓子総選挙～神7を作っちゃおう～」です。その際に役立ったのが、「菓子屋ぶんぶん」での経験でした。その経験を参考に駄菓子を使って企画を練り上げました。そして、ミーティングの結果、一般の人を巻き込んだ参加型のイベントに決定しました。

次に、「菓子屋ぶんぶん」のロゴマークを作成したいという企画が上がりました。埼玉県で活動するプロのイラストレーターさんとコラボし、半年時間をかけながら、オンラインワークショップをしました。無事に完成にまで漕ぎつけました。

最後は、「チョコっと　文房具ブーケワークショップ」作成です。誰でも楽しめる文房具を使ったキャンディーブーケ作りです。この企画で

菓子屋ぶんぶんの営業時の様子。ハロウィンの時期に合わせ内装を工夫し、お菓子を入れるカゴをカボチャの形にしたり、ランタンを置くことでハロウィン感を演出させた。

大学初のオンライン文化祭の本番当日の様子。一から企画し出演をするという貴重な経験をすることができた。企画した駄菓子総選挙では、87名の方に参加して頂くことができた。



文化祭の参加特典として招待した、文房具ブーケワークショップを開催するにあたって、プロのイラストレーターさんにご協力いただき作成した、ぶんぶんのロゴを入れたラッピングペーパーである。

文化祭の特典として招待をし開催した文房具ブーケワークショップの際に、学生だけの模擬ワークショップを行った中で、学生が作成した文房具ブーケである。

一番大変だったのが、Zoomでした。文京学院大学は、Teamsで授業や連絡などをしているため、初のZoomで問題が多発しました。そこを、夜中までZoomをつなぎ悪戦苦闘しながら、みんなで解決していきました。もちろん企画も重要でしたが、それを成し遂げていく「プロセス」の重要性を実感できたかと思います。

コロナ禍ということで、マイナス面は多々ありますが、活動を通じて、「コロナ禍だからこそ経験できたことばかりだった」と振り返ることができる貴重な経験であるといえます。

コロナ禍における地域活動 ふじみ野キャンパス編 パネル

コロナ禍における地域活動 ふじみ野キャンパス編

文京学院大学 人間学部 コミュニケーション社会学科 3年
荒井美咲 近日向子 駒津舞香 中舘莉子

1年生のとき

まちラボふじみ野に入った理由

大学生生活のなかで、何か自分の成長につながるようなことがしたいという想いがありました。

そんなときまちラボのことを知り、直感で“ここでなら自ら挑戦し成長していくことができる”と思いました。

まちラボふじみ野について

授業でもサークルでも委員会でもなく自主的に地域に出て活動し、学生・教員・企業・行政・地域住民と共に私たちができること・やりたいことを考え実行できる場です。

学生10名と、教員約４名で活動しています。

ぶんぶんについて

2019年から始まった地域活性プロジェクトで、商店街の空き店舗を活用運営する駄菓子屋をしていました。

地域や行政の方々の支えのもと楽しく活動し、たくさんの方々にご愛好頂きましたが現在はコロナの影響と学内での話し合いにより「菓子屋ぶんぶん」を終了することになりました。

しかし私たちは「ぶんぶん」として新しく生まれ変わり、駄菓子の枠組みを超えて今だからこそ出来ることを考えました。

2年生のとき

新型コロナウイルス感染拡大　集まることができず活動に制限がかかる。

毎週オンラインミーティングを実施、今この状況でなにができるのか話し合う

やりたいこと	オンライン学園祭に出たい	ロゴを作りたい	キャンディブーケワークショップをやりたい
課題１	どんな企画案に？	作り方がわからない	好き嫌い、アレルギーのある子はどうする？
解決策１	1年の時の活動がヒントになる！	学生対象のロゴワークショップ	食品をやめて文具をつかったブーケにしよう！
課題２	対面ではできないのでオンラインで実施		
解決策２	駄菓子を使って一般の人を巻き込んだ参加型のイベントを開く	TeamsやZoomを勉強。わからないところは夜中までZoomでつないで解決	

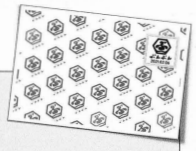
あやめ祭　駄菓子総選挙

YouTubeから生配信で行われた学園祭。まちラボふじみ野では、「駄菓子総選挙」を企画し、Formsを利用して一般の方々に好きな駄菓子を投票してもらう総選挙を行った。人気の上位7個の駄菓子を「神７」とし、1位はブラックサンダーであった。感染対策を取りながらではあったが、気軽に会えない状況の中だからこそ大学に集まって駄菓子総選挙を開催することが学生間での一体感をより強めた。

駄菓子総選挙の参加特典である文房具ブーケワークショップの参加希望者は23組！

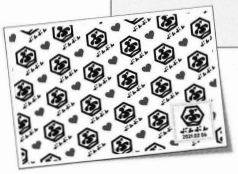
ロゴマーク

何度も話し合いを重ねて作り上げたマーク。
ブーケのラッピング用紙として使用するため、紙の種類やデザインを考え、オンラインで画面共有をしながら完成させた。



文房具ブーケワークショップ

あやめ祭で実施した企画アンケートの参加特典として企画。
司会進行、日程調整、講師の方とのやり取り、全体での情報共有などを行い、後日一般参加者のフィードバックなども含めて大きな達成感を得られたワークショップになった。



**コロナ禍でやりたいことに制限がかかってしまったが、
コロナ禍だからこそ経験できたことばかりだった。**

コロナ禍における地域活動：本郷キャンパス編

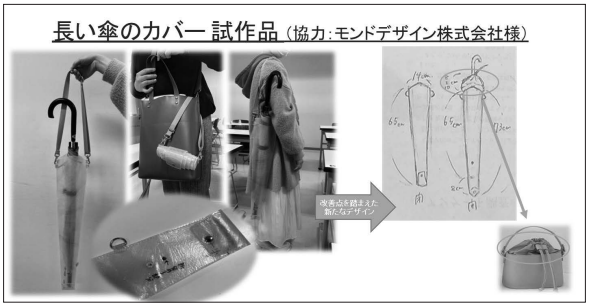
授業名：まちラボプロジェクト演習
プロジェクト名：SDGs（持続可能な開発目標）推進を目指した環境配慮型社会の創造
―廃棄ビニール傘・再資源化（製品化）プロジェクト―

文京学院大学 人間学部コミュニケーション社会学科3年
荒井美咲・駒津舞香

続いて、本郷キャンパス編の紹介をさせて頂きます。表題にあります活動に取り組みました。具体的には、SDGs項目の12番，14番，15番の3点に着目し、プラスチック製品が与える環境汚染や廃棄ビニール傘の現状・リサイクルにおける課題点からビニール傘を再利用した商品製作です。

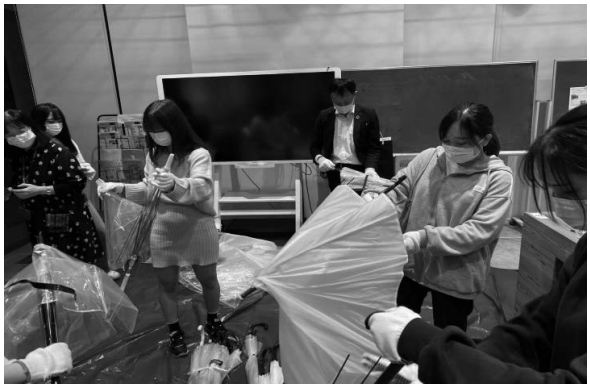
コラボ先は、実際にビニール傘を再利用した製品を製造・販売しているモンドデザイン株式会社様と資源回収を行う大谷清運株式会社様で、両社の協力のもと、「捨てられた傘を使った捨てられる傘を減らす取り組み」というコンセプトを掲げ、製品のデザイン立案やプロモーションを行っていきました。

具体的に、モンドデザイン株式会社様とのやりとり（すべてオンライン対応）を一部紹介します。傘カバーの製作に至った理由から、それをどのような付加価値や話題性の獲得を目指して消費者に届けていくのかを考え、価格帯やターゲットの設定をしました。



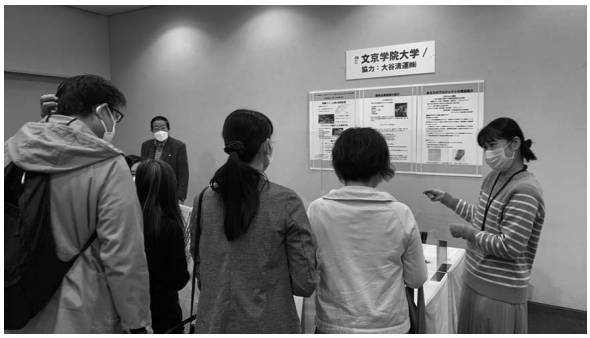
初めの企画書をもとに生まれた長い傘カバーの試作品（左）と、学生同士で改善点を洗い出し再度作成した2回目の企画書内容（右）。デザインを考える際には、製品の使いやすさや見た目等を利用者目線にたって考えることを意識した。

他にも、大谷清運株式会社様にご協力いただきながら、自分たちで回収した傘の解体作業を対面で実施し、日本のビニール傘の消費現状について学び、その後解体作業に向けた傘の構造や分解方法などを学びました。



自主回収した傘の解体作業に取り組む様子。
（協力：大谷清運株式会社様）
数少ない対面での実践活動であった為、皆で楽しみながら解体作業を行った。ビニール傘の消費現状や構造についても知ることが出来とても貴重な経験であった。

そして11月には文京区で実施された「エコリサイクルフェア」に出展し、またNPO法人CFFジャパンの皆様と共に杉並区への提言書の作成（「杉並区プラごみ削減宣言」草案の作成）に向けた話し合いを試みました。



「エコリサイクルフェア」に出展時の様子。
2日間で約170名のお客様がブースに訪れて下さり、自分たちの活動内容やビニール傘が与える環境への影響を発信する大きな機会となった。

NPO法人CFFジャパンとの意見交換会時の様子。
２つの班に分かれ、製作中の傘カバーの使途についてと「杉並区プラごみ削減宣言」の草案作成についてそれぞれ議論を深めた。自分とは異なる他者の考えを沢山知ることが出来とても濃い時間であった。

以上の活動を通して私たちは、プラスチックごみによる環境問題に対して一人一人がしっかりと向き合い、その上で自分たちの出来ることから取り組んでいく必要があると考えさせられました。

また、オンラインでの企画会議の際には、使用する生地の質感がイメージしにくかったり、試作品に関するこちらの質問事項が相手に伝わりにくいなど苦労した点も多々ありましたが、その都度実際に使用する生地を送ってもらったり、文面での質問事項の伝え方を分かりやすいよう配慮するなどを通じて、対面での話し合い以上に、学生同士や関連企業様とお互いに工夫やアイデアを出し合いながら活動に取り組んでいくことが、より良いものを作り上げる上でとても重要であると感じさせられました。

コロナ禍における地域活動　本郷キャンパス編

まちラボプロジェクト演習

SDGs（持続可能な開発目標）推進を目指した環境配慮型社会の創造
―廃棄ビニール傘・再資源化(製品化)プロジェクト―

文京学院大学 人間学部 コミュニケーション社会学科 3年　19HR120　駒津舞香
文京学院大学 人間学部 コミュニケーション社会学科 3年　19HR202　荒井美咲

まちラボプロジェクト演習とは？
大学の授業の一環で、1人の教員と学生約10名で企業、行政、地域住民といった様々な立場の人たちとともに社会問題の解決を目指すためのプロジェクト

背景
1．プラスチック製品による環境汚染
●プラスチックが海に漂流 ⇨ 海洋生物の体内に蓄積されてしまう
●海洋生物が体内に取り込んだマイクロプラスチックを人間が口にする可能性の指摘
2．廃棄ビニール傘の現状と課題
●年間捨てられているビニール傘は推計6500万本
●ビニール傘の多くは材質が一定ではないことからリサイクルが難しい

概要
SDGｓ（持続可能な開発目標）の3点に着目
持続可能な世界を実現するための17のゴールで構成された2030年までの国際目標

●「捨てられた傘を使った捨てられる傘を減らす取り組み」
→ビニール傘を利用した商品の製作（デザインの立案、傘の回収、プロモーション）

12 つくる責任 つかう責任　14 海の豊かさを守ろう　15 陸の豊かさも守ろう

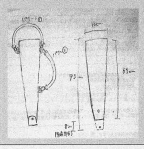
株式会社モンドデザインとのコラボ

モンドデザイン株式会社
・「日本にも、環境に優しいデザイン」をコンセプトに、商品やサービスを通じ、驚き・喜び・感動を提供し、環境・社会に対し貢献できる企業となることを目指す。
・アップサイクル製品の販売を行っている。

商品化デザイン
●製作理由：
ビニール傘の廃棄問題、傘用ビニール袋、使用済みレジ袋などによる環境問題への悪影響
⇩
商品に「捨てられたビニール傘の再利用」という付加価値をつける
環境保護的意識から話題性の獲得も期待できるのでは？

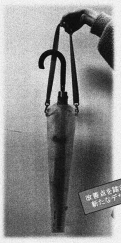
●価格帯：4000円以上
●ターゲット：20歳以上の男女

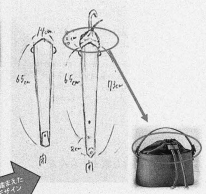
何度もオンライン会議を重ね
企画案を作成



工夫点
●3つ折りにする
●先端部分を折り返してパッチンで止める
●肩掛け部分を取り外し可能にする
●肩掛け用と手持ち用の2WAYタイプにする

長い傘のカバー 試作品





改善点を踏まえた新たなデザイン

●今後の改善点
・カバー上部に巾着のようなものを取り付ける
(理由：傘の長さや太さの違いがあってフィット感を維持出来ると考えたため)
・肩掛け時に安定性がなく危なそう
→金具の位置を変更
・水貯め部分が小さく溢れてしまいそう
→留め具の位置を上に移動
・紐の金具が重く、ガチャガチャして気になる
→プラスチックパーツに変更
・紐のカラーバリエーションが欲しい
→可能（シルバー,水色,黄色,ピンク,紫）

再度オンライン会議を実施し
改善案を作成

2022年1月商品完成予定

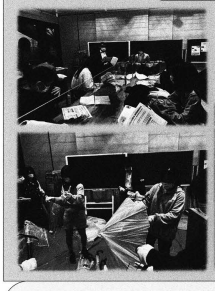
この活動を通して
プラスチックごみによる環境問題に対して一人一人がしっかりと向き合い、その上で自分たちの出来ることから取り組んでいく必要があると考えさせられた。オンラインでの企画会議は、使用する生地の質感がイメージしにくかったり、試作品に関するこちらの質問事項が相手に伝わりにくいなど苦労した点も多々あった。学生同士や関連企業様と対面での話し合い以上に、お互いに工夫やアイデアを出し合いながら活動に取り組むことが、より良いものを作り上げる上でとても重要であると感じた。

株式会社大谷清運とのコラボ

大谷清運株式会社
・東京23区の清掃事業からスタート
・資源回収を行っている。

【4つのコア事業】
・運輸事業
・処分リサイクル事業
・清掃事業
・企画制作事業

回収した傘の解体作業

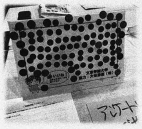


傘についての基本と
ビニール傘の分解
の仕方を学んだ

解体後

文京エコ・リサイクルフェア
●日付：令和3年11月5日（金）・6日（土）
●会場：文京シビックセンター
●家庭でできるごみ減量の工夫や、環境・3Rに関することをパネルや展示品で紹介するイベント

◎文京学院大学
・廃棄ビニール傘の環境影響、プラスチック製品による環境汚染、まちラボプロジェクトの商品紹介、ビニール傘の廃棄についてなどのポスター掲示
・アップサイクル（長い傘のカバー）の試作品の展示



ブースに訪れたお客様
2日間で約170名

長い傘のカバーの試作品
に関する意見もいただいた

若者の意見交換会
●日付：令和3年12月19日（日）
●会場：阿佐ヶ谷地域区民センター
●NPO法人CFFジャパンの皆さんとともに杉並区への宣言書提案に向けたプラスチックごみ削減に関する議論を行う

～議題内容～
①廃棄ビニール傘のビニールを使った傘カバーの使途について
②「杉並区プラごみ削減宣言」草案作成

シンポジウム報告書
氷川下つゆくさ荘×跡見女子大

跡見学園女子大学
上野穂乃佳・小松美月・佐久間愛美

初めにつゆくさ荘が出来た経緯、私たち学生が関わらせていただくようになった経緯をお話します。

つゆくさ荘がある千石3丁目は坂に囲まれた場所にあり、他の文京区内にある地域のコミュニティの場に行きづらく、地域の人々が繋がりにくい状況にありました。そこで空き店舗を改装して地域のニーズを汲み取り、気軽に相談できる場、地域の居場所として氷川下町会の方々、地域の有志の方々、文京区社会福祉協議会の方、区内に本社があるエーザイ株式会社さんを中心に2020年コロナ禍の中オープンしました。

私たち学生は、地域活動で抜けがちな若者世代としてSNSの運営やフリーペーパーの活動を通じて関わらせて頂いています。

先ほどお伝えした通り、つゆくさ荘はコロナ禍の真っ最中にオープンいたしました。そのため、計画していたイベントが中止になり、現地での活動ができないなど思い通りにならないことも多々ありました。その中で、私たちが行なってきた活動を紹介します。

まずコロナで現地で活動が行えない時も月1回月末にオンラインによる定例会を開催しています。そこでは、親睦を深めるためのチームビルディングや1ヶ月の活動報告、今後行いたい活動について話し合いをしています。

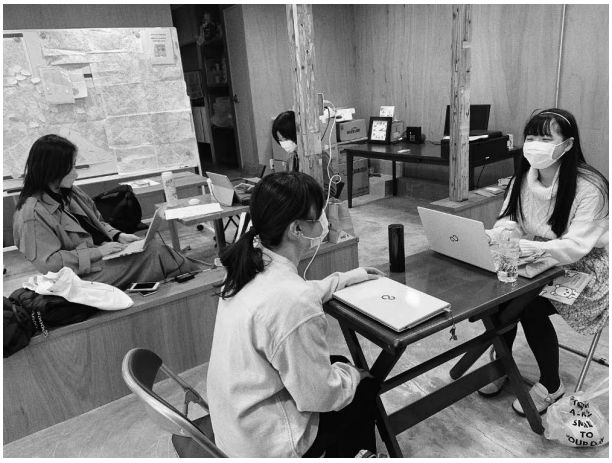
そして学生中心で行っている活動としてフリーペーパーの作成とSNSの運営についてお話しします。フリーペーパーは、コロナ禍でのオープンでまだつゆくさ荘がどんな場所なのか知られていないので地域の人に向けて発信するため今年から始めた活動です。現在は創刊号を発行し、文京区内の県人寮に置かせて頂いたり町内会のハロウィンイベントで配布しました。今後2号3号も発行予定です。

SNSはTwitterとInstagramを学生が運営し投稿しています。イベントの告知や活動の報告を月2回のペースで投稿しています。この投稿ではSNS担当チームを大人の方々とともに作り、投稿内容を全員で確認し、投稿しています。なかなか現地での活動ができない時には学生の個人個人の日常についての投稿を行うなど、地域の方々につゆくさ荘を身近に感じてもらえるよう堅くなりすぎない学生らしいSNSの雰囲気づくりを心がけています。

コロナウイルスの感染拡大が落ち着いていた2020年の11月にはつゆくさマルシェを行いました。つゆくさマルシェでは地域の方による野菜やコーヒー、パンの販売、私たち学生からは小さい子でも楽しめるような輪投のブースと駄菓子の販売を行いました。

2020年、2021年10月末には、町内で行われたハロウィンウォークのお手伝いをしました。2020年、2021年の2年連続でハロウィンのイベントに携わらせていただきました。地域の方や地域の子供達との交流ができ、貴重な体験となりました。

そして現在は、イベントがなくても常時開けて誰でも立ち寄れるスペースにするためのオープンデーを週2程度の頻度で行っています。ふらっと立ち寄ってくれた地域の方がスマホの使い方で分からないことがあった際、一緒に操作して問題を解決しました。また、開いていることでつゆくさ荘の中をのぞき込んでいたり、中にいる私たちに声をかけてくださったりと地域の方と交流する機



つゆくさ荘内観

つゆくさ荘外観

オンライン会議の様子

オープンデーの様子

会も増えてきました。

コロナ禍におけるつゆくさ荘での跡見学園女子大学の活動を報告させて頂きました。今後、小学校での学習ボランティアや区内で地域活動をされている団体さんとの交流を深めつながりを広げ、つゆくさ荘の存在を地域の方に知ってもらったり、地域で活動したいという人と場の提供の橋渡しとなったりするなど、つながりを大切にこれからも私たちにできること、私たちの立場だからできることを積極的に見つけ取り組んでいきたいと思います。

シンポジウム報告書つゆくさ荘×跡見女子大 パネル

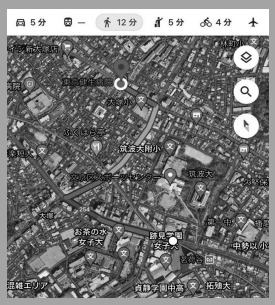
つゆくさ荘の外観

つゆくさ荘の内観

つゆくさ荘とは、文京区の千石三丁目にある地域の居場所としてオープンしている場所です。
気軽に立ち寄り相談できる場所、地域の居場所として氷川下町会をはじめとした地域住民の有志の方々に加え、文京区社会福祉協議会の方々、区内に本社のあるエーザイ株式会社さんを中心に、空き店舗を活用し、昨年コロナ禍の中オープンしました。

「**つゆくさ荘**」で検索すると出てきます！
東京健生病院の目の前、大塚小近く。
茗荷谷駅・跡見女子大から徒歩12分ほど

周りが坂に囲まれた場所にあります。



コロナ禍での活動

月1回、月末にオンライン会議をしています。
現状報告や今後の活動などについて、
毎月大人の方々とともに話し合いを行っています。

緊急事態宣言の期間でも私たちができることはないかと模索し、フリーペーパーを制作しました。
現在2号まで完成しています。

つゆくさ荘での活動

ハロウィンウォークの受付を学生が行いました。
（2020、2021）

つゆくさ荘マルシェの様子（2020）

オープンデーの取り組み

つゆくさ荘ではオープンデーを開催。
地域の方が気軽に立ち寄りお話をしたり、
高齢者の方にスマホの使い方をお教えしたり…。
開けておき人が居ることで立ち寄りやすい場所になり、
地域の方につゆくさ荘をより身近に感じていただけると思います。

SNS活動

学生がつゆくさ荘の情報をSNSで発信中！

ぜひチェックとフォローをお願いします！

Twitter
@tsuyukusa_atomi

Instagram
@tsuyukusasou_atomi

TSUYUKUSASOU_ATOMI

ご覧いただきありがとうございました！
ぜひつゆくさ荘に関心を持っていただければ嬉しいです！

氷川下 つゆくさ荘 HIKAWASHITA TSUYUKUSA-SO

ATOMI GAKUEN

デイキャンプで遊ぼう会
～千葉県の里親子と大学の共同デイキャンプ～

東洋大学 社会学部社会福祉学科 森田ゼミ
下田昂輝・杉原みなみ・上田安希子

1．企画概要

〈開催日程・時間〉
2021年11月3日（水）10：00～15：00

〈開催場所〉
千葉県船橋市青少年第2キャンプ場

〈主催〉
学生課外活動育成会、東洋大学ボランティア支援室

〈後援〉
特定非営利活動法人こども福祉研究所

〈参加者〉
千葉県在中の里親家庭と関係者、東洋大学社会学部社会福祉学科森田明美ゼミの学生3・4年生、本学学生、本学教員、森田研究所の関係者
（内訳）里親子43名、船橋市役所3名、学生51名、大学教員関係者8名、合計105名

〈目的・効果〉
里親は都道府県知事が委託する事業であり、この親子の実態調査と支援が基礎自治体ではほとんど行われておらず、地域支援を受ける機会はほとんどない。それを学生が主体となり仲介し、地域の人たちとデイキャンプをしながら交流を図る。

大学生は子どもたちと共にデイキャンプ場内で保護者の方の目の届く範囲で遊び、里親のみなさんには子育てについての相談や雑談など、里親同士で交流できる場を提供する。また、その中で里親子がリラックスできる空間づくりを行う。

2．活動スケジュール

11月3日水曜日。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、昨年と同様に例年より約半年遅れでデイキャンプが開催された。当日は、天候にも恵まれ、無事に活動をすることができた。

開催場所は、船橋市立青少年第2キャンプ場で行われた。この活動自体は、児童福祉を学んでいる学生たちを中心に、続けられているものである。今年度も、多くの一般学生にボランティアとしてデイキャンプに参加していただき、参加を希望する一般学生には里親子の置かれている状況を理解するために、10月20日水曜日の昼休みに事前学習を必ず受講していただいた。

東洋大学から観光バスで向かった。キャンプ場に到着後、里親子の方々と合流し、活動が始まった。開会式では、ワクワクし心躍らせている表情の子、少し不安そうな顔をしている表情の子がいました。開会式が終わり、その後にウォークラリーを行った。

ウォークラリーでは、キャンプ場内にあるポイント地点でペアの学生と子どもたちが協力しながらレクリエーションを行った。そこで景品として、おにぎりや果物などを得ていく形で昼食の準備を行いました。

昼食では、ウォークラリーで得ることが出来たおにぎりや果物を子どもたちが美味しそうに食べている様子を見ることが出来ました。

午後は、おにごっこやボール遊びなど、子どもたちがしたい遊びを自由時間として行いました。

閉会式では、不安そうな顔をしていた子どもも表情が明るく満足げな表情をしていました。里親

集合写真

ウォークラリーでのレクリエーション

昼食風景

午後のボール遊び

の会の代表の方からの感謝のお言葉をいただき、その後森田先生から感想や締めの言葉をいただき、最後に全体の集合写真をとり解散となりました。

3．里親さん・子どもたちの感想

・子どもたちが学生と遊んでいる間にコロナの影響で中々会うことの出来なかった里親のみなさんとお話などの交流をすることが出来てよかったです。子どもたちが横にいると話せないこともあるので感謝です。
・またあそぼうね
・うぉーくらりーがおもしろかった。おかしがいっぱいもらえてよかった。

4．まとめ

最後に、このデイキャンプは行ったからよいというものではなく、どのようにしてこれからも里親子を支えていけるのかを考える事が大切です。継続的な支援、それは来年もこのデイキャンプを開催できるように準備する所からもう始まっていると思います。今年よりも充実したデイキャンプになる様にして行けたら何よりです。

デイキャンプで遊ぼう会 ～千葉県の里親子と大学の共同デイキャンプ～ パネル

デイキャンプで遊ぼう会
～千葉県の里親子と大学の共同デイキャンプ～
社会学部社会福祉学科　森田ゼミ

東洋大学

活動概要

- 日時・・・ 2021年11月3日（水） 10:00～15:00
- 会場・・・ 千葉県船橋市立青少年キャンプ場
- 参加者数・・・ 105名 内訳（学生51名、大学教員関係者8名、船橋市役所3名 里親子43名）
- 協力・・・ 特定非営利活動法人こども福祉研究所
- 目的・・・大学生は子どもたちと共にキャンプ場内でウォークラリーや鬼ごっこ、かくれんぼなどの遊びを行い、里親の皆さんには、里親同士で交流を行える場を提供する。その中で里親子がリラックスできる空間を作り、日々の不安や悩みを少しでも解消してもらう。

2

タイムスケジュール

10:00	（ゼミ生）受付開始	（里親子）キャンプ場着	・ ウォークラリー ポイント地点でじゃんけんやなぞなぞなどのゲームを行い、昼食のおにぎりや果物、シールなどをもらう。 ・ 自由時間 昼食後は、子どもたちの意向に沿う形で鬼ごっこやかくれんぼ、ボール遊びなどを行った。
11:00	開会式（自己紹介など）		
	（本学学生・里親子）ペアごとにウォクラリー		
12:00	昼食		
12:30	（ゼミ生・本学学生・里親子）ペアごとにお話や鬼ごっこ遊びなどの自由時間		
14:15	閉会式		

3

～活動風景～（ウォークラリー）

東洋大学

ウォークラリーのポイントでおにぎりを貰うためのレクを行っている！

ウォークラリーのポイントでサンドイッチを貰うためにクイズを解いている！

4

～活動風景～（段ボール遊び）

東洋大学

テーブルに段ボールを貼り付けて基地的なものを作成している

基地の中に隠れて遊んでいる

5

～活動風景～（昼食・自由遊び）

東洋大学

ウォークラリーが終わった後の昼食

午後の自由時間

6

東洋大学

里親子さんからの感想

- これまで2回参加させていただいて、子どもたちが楽しそうに遊んでいたため今回も参加を決めた。大学生の方と遊んでもらう機会は普段ないため貴重だと思う。何より子どもたちが今回のデイキャンプを楽しみにしていた。子どもたちが楽しんでいる姿を見ることができ、親は楽をさせてもらった。
- 外で開放的に遊ぶことができ楽しかったようで、出来事を話していた。来年はカレー作りをして食べられるようになれば嬉しい。
- 子どもたちに対して充分な人数で遊んでもらうことができ、ありがたかった。多くの学生に注目してもらえ嬉しそうだった。また、幼い時より今回の方が楽しかったとの事でまた参加したいと言っていた。
- できれば里親もイベント参加がある等、コミュニケーションの場が欲しいと感じた。子どもたちは楽しんでいたが、保護者は少し手持ち無沙汰だった。

11

東洋大学

- ここ数年、毎回参加しており子どもも大学生の方たちに遊んでもらうことを楽しみにしていた。特に今回は、昨年・今年とイベントが少ない中参加を楽しみにしていた。
- 子どもたちが学生の方々に遊んでもらっている間に、コロナの影響でなかなか会えなかった里親の皆さんと交流することができありがたかった。子どもたちがすぐ横にいると話せない事もあるため、面倒を見てくれて感謝。
- 学生の方々や他の子どもたちと遊ぶ様子を見て、親の方が気が付かなかった子どもの成長を見ることができ良かった。いつまでも「小さい子」扱いしていてはいけないと気付かされた。
- 学生の方々が優しく、とても楽しかったと何度も言っていた。ドッヂボールや鬼ごっこなど、やりたいことに応じて一緒に遊んでくれたことが嬉しく、自分の思いを大切にしてもらえたと感じたと思う。

12

東洋大学

「楽しかった！」「また行きたい！」
「また一緒にご飯食べようね」「大好き」

「色々な遊びをいっぱいできて面白かった」
「ウォークラリーが面白かった！」
「お菓子がいっぱいもらえて良かった」
「どんぐりを拾って楽しかった」

「次もみんなで集まって遊びたいです」

13

地域のひきこもり支援団体との協働

跡見学園女子大学 心理学部臨床心理学科 板東ゼミ3年
久保杉真名佳・茶村菜々子

1．活動

地域のひきこもり支援団体との協働

2．活動報告

板東ゼミのゼミ生は2020年9月からNPO法人（特定非営利活動法人）サンカクシャと協働し、ボランティアとして活動を行っている。15歳から25歳ぐらいまでの不登校、ひきこもりの若者が参加する居場所（文京区の千石／豊島区の要町）に板東ゼミの学生が月1回から3回ほどお邪魔して支援に携わっている。

居場所にてみんなで料理をする様子

・NPO法人（特定非営利活動法人）サンカクシャとは

NPO法人（特定非営利活動法人）サンカクシャは2019年5月24日に設立された。学校や社会に馴染めない15歳から25歳ぐらいまでの若者が孤立せず、どんな道に進んでも生き抜いていけるよう、若者たちの社会サンカク（参画）を支援している。オンラインや電話による支援、支える人を増やす人材育成、職業体験、アルバイト体験の提供、居場所の運営等を行い、若者ひとりひとりに向き合った支援を行っている。

※被支援者の方々のことをサンカクシャは若者と呼んでいる。

居場所の若者が“見習い店員”として接客を経験している様子

・ボランティアの主な活動

居場所では、若者たちと一緒に時間を過ごしている。例えば、若者たちと一緒にゲームをする、買い物に行き、夕飯を作り、食事をするなどである。これらは、ただ時間をともに過ごし、遊んでいるだけだと捉えられてしまいがちだが、そうで

居場所でボランティアと若者が一緒にテレビゲームで盛り上がる様子

はない。ともに時間を過ごす中で若者が就職や進路等の将来について考えることにつながる話ができる。また、若者の価値観の理解に務めることで、若者にとってのなりたい姿を一緒に形にしていくことができる。

・その他活動

サンカクシャの運営チームに入れてもらいクラウドファンディングを行ったり、若者がラジオ局の方とコラボし文京区の紹介動画を作成するのをサポートしたり、若者の職業体験のサポートをしたりした。

クラウドファンディングプロジェクト達成時の写真

・コロナ禍での居場所

コロナ禍の居場所では、ボランティアの人数を減らす、食事の際は黙食をする、使ったものはこまめに消毒する等、若者が安心して居場所に来れるよう、感染対策を行いながら居場所を継続した。しかし、感染予防のために料理をしなくなり、食事中も黙食をすることにより会話できるタイミングが減った。これらの時間は若者に話しかけやすく、関係構築をしていくうえで重要な時間であったと実感した。今まで以上に若者たちと会話できる、一緒にいられる時間を大切にし、成長している変化を見逃さないようにと思うことができた。また、オンラインでの活動も増えた。オンラインで学園祭に参加、実際に働く方々とお話をする機会等を設け、若者たちの興味、将来に寄り添いながら活動を行った。

・おわりに

コロナ禍になったからこそ人と関わることの重要性、必要性をより感じる。孤立を防ぐために必要不可欠である人との関わりを提供する、社会人や大学生など様々な人が集まる「居場所」という場所があること自体が価値であると思った。

コロナ禍での活動を通して、換気・消毒・人数調整等の感染予防対策を十分に行うことで、対面での支援が可能であると思った。また、オンラインでの活動は直接だと参加しづらい若者にとって参加しやすくなると思った。オンラインでの支援は工夫次第で今後も有効であると考える。対策・工夫を行うことで若者たちへの支援を途絶えることなく、継続していくことも価値であると思った。

地域のひきこもり支援団体との協働 パネル

地域のひきこもり支援団体との協働

サンカクシャとの協働

- NPO法人（特定非営利活動法人）「サンカクシャ」と協働
- 坂東ゼミのゼミ生は　2020年9月から参加
- 15～25歳ぐらいの不登校・ひきこもりの若者が参加する居場所（千石／要町）に、板東ゼミの学生が月１～３回ほどお邪魔して、支援に携わっている。
- ゼミに来ていただき活動の振り返りも行った。

NPO法人　サンカクシャ

- 2019年5月24日に設立
- 若者の孤立を防ぐ伴走支援

多くの支援は義務教育や１８歳で終了するがサンカクシャは若者が社会とつながりどんな道に進んでも生きていけるようになるまで支援を行っている。

- 活動

オンラインや電話による支援　　支える人を増やす人材育成
職業体験・アルバイト体験の提供　　居場所の運営　etc

ボランティアの主な活動内容

居場所に来る若者と一緒に時間を過ごす
ex)ゲーム、買い物、夕飯作り、食事

→ただ時間を過ごしているだけではない

☆若者が将来について考えることにつながるような対話

☆若者の価値観を理解することで、若者にとってのなりたい姿を一緒に形にしていく

☆学習性無力感から抜け出せるような言葉をかける

その他の活動

- クラウドファンディング

若者に必要な支援のための資金援助を得る。

- 動画作成補助

若者が文京区についての紹介動画を作成するのに協力する。

- 若者の職業体験のサポート

若者が職業体験を通し自信をつけられるようにサポートする。

コロナ禍の活動

- 居場所の感染対策

☆到着時に検温・消毒・手洗い・体調観察の記入を行う

☆常にドアと窓をあけ換気

☆ゲーム機や机など使うものをこまめに消毒

☆食事の際に距離をとり静かに食べる

・難しかった・気をつけた点

☆離れて静かに食べる＝会話ができるタイミングが減る

一緒に食事を作ったり食べたりしているときは若者に話しかけやすく、信頼関係を築くのに役立っていた。

↓

会話ができる時間をより大事に、若者の興味関心について積極的に聞く。

ミーティングで若者との関わり方を相談する。

☆コロナに感染しない

若者が安心して過ごせるように、活動を続けていくために大切な信用を失わないように感染予防に努めた。

コロナ禍における対面での支援の価値

孤立を防ぐために必要不可欠な人との関わりの提供。

社会人や大学生など様々な人が集まることで将来を広い視野で考えるきっかけが作られる。

支援から漏れる人が出たり支援が途中で途切れるたりするのを防げる。

若者は変化し続けている
→実際に会うことで適切な支援を届けやすくなる。

活動に参加して

- コロナ禍の対面での活動は感染予防の面からよく思われないこともあるが、居場所で若者と関わり、実際に会ってコミュニケーションを取ることに意義があると感じた。
- 換気・消毒・手洗いうがい・体調記録・人数調整といった感染予防対策を行うことを徹底すれば対面での支援も可能だと感じた。
- コロナ禍で増加した社会問題（児童虐待など）の改善には居場所のような場所が必要である。

地域の食品ロスを減らそう！

拓殖大学 FWR（Food Waste Reduction）
鈴木翔太

活動背景

拓殖大学では、社会や地域への貢献、国際交流、ボランティア、大学の活性化などにつながる活動を積極的に行う学生をサポートする「学生チャレンジ企画」を実施しています。この企画は、創立110周年を記念して2010（平成22）年度にスタートしました。昨年度はコロナの影響で中止となり、今年度で12回目を迎えました。拓殖人材育成のためのボランティア推進、国際交流、スポーツ振興など様々なプロジェクト活動で成果を残し、これらは持続可能な開発目標（SDGs）と方向性が合致することから、SDGsを活用し重要な社会的役割を担う人材の育成を目指しています。

私たちFWRは学生チャレンジ企画に採択された団体のひとつです。

はじめに

壁にぶつかることばかりで、とても大変な企画でしたが、多くの方にご協力いただき無事に冊子Ethical Eatsの完成に至りました。この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

活動を通しての気づき

コロナ禍と重なり活動の様々な場面で壁にぶつかりました。

区役所と協力して行う予定が、行政の方針転換により計画変更を余儀なくされ、学生食堂との予定も緊急事態宣言の発出で中止になりました。そのため、ポスターを作って街のお店に連絡を取り活動を理解してもらうことから始めました。その後も受入可能だった店舗が直前に取材できなくなってしまい、掲載予定店舗数が大幅に減るなどの困難に直面しました。解決策として飲食店の概要や活動、理念を詳しく解説することにより、質を落とさず冊子を完成させることができました。予定通りには行きませんでしたが、自分達でしっかりと考えられたことにより活動をより良い方向へと導くことができたと振り返ります。

活動するにあたり意識的に取り組んだのが、PDCAサイクルの実践です。Plan（計画）、Do

KNETEN様にポスターを渡す様子

ミョウガデザイン様との打ち合わせ

掲示用ポスター

冊子Ethical Eatsの表紙

（実行）、Check（評価）、Action（改善）に試みたからこそ、皆さんにこの活動を知っていただく成果を残せました。主体性を持ちPDCAサイクルを実践することが、活動する上で大切なことであると気づけたのは大きな財産です。さらに、この活動を通して問題解決力、コミュニケーション能力、交渉力、予算管理能力が向上したと考えています。特に交渉力はかなり伸びたと感じています。これは店舗にアポイントメントの依頼や学生割引の提案、ポスターの設置を交渉した経験によるものです。

将来、社会に出た際にこれらの力を実感することがあれば、私は本活動における成長が本物であると確信できると思います。

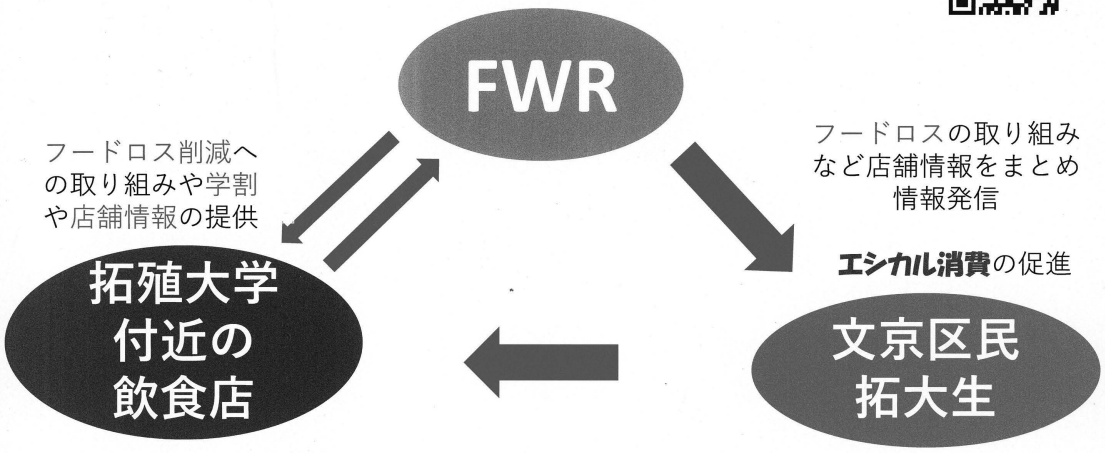
すべてのチャレンジが自分自身の成長につながり、無駄なことは何一つありませんでした。SDGsの観点から地域振興にも取り組めたことから、活動に挑戦してよかったです。

FWRの活動　パネル

FWR の活動

2021年度 第12回 学生チャレンジ企画

FWRの活動モデル



FWRが紹介した店舗の取り組みを応援するため
食事に訪れる
エシカル消費

活動の経緯について

ゼミナールに入りSDGsについて学ぶので、その実践として何か活動をしたいと思い、この活動を始めました。その中でもアルバイト先のフードロスが気になり、それがきっかけでフードロス問題を扱うことにしました。

フードロスとは？

フードロスとは、まだ食べられるのに廃棄される食品のことです。日本での食品ロスを国民一人当たりに換算すると、"お茶碗約1杯分(約130g)の食べもの"が毎日捨てられています。

エシカル消費とは？

エシカル消費とは消費者それぞれが各自にとっての社会的課題の解決を考慮したり、そうした課題に取り組む事業者を応援しながら消費活動を行うことを言います。
エシカル消費というのは、通常、環境保全に配慮した商品を購入する、労働環境に十分配慮した労働を実践している企業の商品を買うなどを示すことが多いと思います。
しかしFWRはお店がフードロス削減を行っていることを社会的問題への取り組みととらえ、それを私たちが発信し、その取り組みを応援したいと思う人がいれば、その人たちが行う消費活動はエシカル消費ととらえることができると考え、FWR独自のエシカル消費を定義し活動を行いました。

「店舗紹介におけるFWRの独自性・特徴」

従来の店舗紹介ではSNS映え、人気メニュー紹介のみで飲食店側の思いや考えは発信されていないという事実があります。そこでわたしたちＦＷＲの店舗紹介は　各店舗のフードロス削減への取り組みを紹介し、さらに店舗の歴史や背景も知ることができるようにしました。さらにお店の方からの一言をもらうなどお店の思いを伝える発信を行いました。

数値としての結果

Instagram　256フォロワーで　Twitter　206フォロワーを活動を通して獲得しました。さらに、文京区長などからフォローされ認知もいただいています。そのほかにも、元NHKアナウンサーでジャーナリストの堀潤さんからもいいねをいただいており、多くの人にこの活動をみていただくことができました。
また実際に私たちの活動に共感して店舗に訪問があったという声を7店舗中5店舗から連絡をいただきました。
さらにInstagramとTwitterで＃FWR紹介店舗で15件投稿されました。これはFWR活動を通してエシカル消費が15件以上行われたといえます。このことから私たちの目的であるエシカル消費の促進が活動を通して達成できたといえます。

活動を通しての気づき

コロナ禍での活動ということもあり様々な場面で壁にぶつかりました。
区役所と協力して行う予定だった活動を、区役所の方針変更により、急遽、計画を変更して自分たちで考えるところから始まり、学食と行うはずの予定も緊急事態宣言で中止になりました。
そこで自分たちでお店に直接連絡をとるところから始め、ポスターを作り、活動を理解してもらう所から始めました。
次に店舗取材のアポをとるときには取材可能だった店舗が直前に取材ができなくなってしまい、紹介店舗が大幅に減るなどさまざまな困難にぶつかりました。
これには1つ1つ飲食店の概要や活動・思いを詳しく説明することで対応し、活動の質を落とさず活動を続けることができました。そしてその結果がエシカルイーツという冊子の作成につながりました。
予定通りではなかったが、そこで自分で改めて考えるということが行えたので活動の質を上げることができたと思います。何よりもエシカル消費の促進ができたことがとてもうれしかったです。

活動の成果物

実際に掲載された東京新聞の記事

『Ethical Eats』

ミョウガデザインと
共同制作のポスター

野菜の食育活動

跡見学園女子大学 石渡ゼミ
鹿田美那海・関　祥加・高井彩乃・繭山エマ・八田英恵

私たち石渡ゼミは食が関連する現代的な課題に取り組んでおり、その1つとして、食育活動を行っています。野菜の食育活動では文京区が主催する「文京ハッピーベジタブルフェスタ」（通称ハピベジ）にて2019年度までに7年連続で参加させて頂きました。

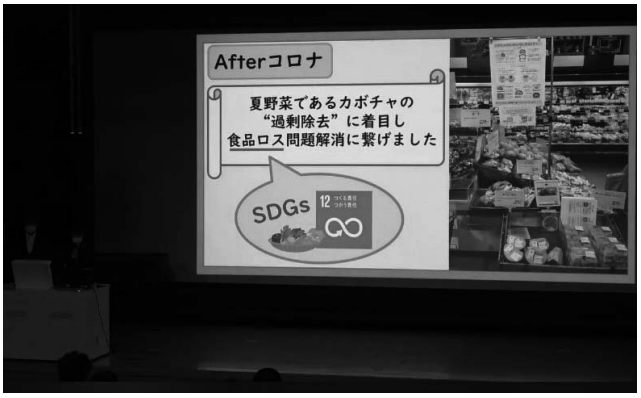
新型コロナウイルス流行前の2019年度は、楽しみながら野菜の栄養に関する知識を高めてもらうことで、来場者の野菜摂取量の増加につなげることを目的に、野菜の栄養吸収率を高める調理法についてポスター展示と体験コーナーを用意しました。その結果、展示ブースには500人を超える来場者が訪れ、レシピを掲載したハンドブックは、用意した350冊が途中でなくなってしまうほど、子育て中のお母さま方から高齢者まで幅広い世代にご好評頂きました。

2020年以降は、新型コロナウイルスの影響で今まで行っていた対面でのイベントは中止となりました。そこで、作成した野菜の食育ポスターを他の場所で展示する方法を模索した結果、アカデミックインターンシップでもお世話になっている株式会社エムアイフードスタイルが展開する高品質スーパーマーケット（クイーンズ伊勢丹・小石川店）で掲示していただけることになりました。当初のポスターは夏野菜をテーマとしていましたが、店舗での展示季節に合わせ冬野菜をテーマにポスターを作り直しました。毎週木曜日の青果の日には、店頭へのポスター展示に加え、ポスターで取り上げた野菜の入荷を増やし、私たちが考えた野菜の時短レシピ集を売り場に設置してくださいました。この取り組みは、大学新聞の2面に掲載され、コロナ禍での活動を評価して頂きました。

今年度Web上で再開された文京ハッピーベジタブルフェスタで、石渡ゼミのハピベジ参加は9年目となりました。今年は通常のトマトより栄養

食育ポスターの展示の様子

12月25日　シンポジウムでの当日の発表の様子①



12月25日　シンポジウムでの当日の発表の様子②

12月25日　シンポジウムでの当日の発表の様子③

価の高いミニトマトの魅力についてポスターを制作し、レシピの考案も行いました。また、昨年からのクイーンズ伊勢丹とのコラボレーションを継続し、今年度も店舗でのポスター掲示や、レシピの配布を行いました。夏は、家庭での野菜の食品廃棄率が高いことに着目し、それを改善するポスターやレシピの考案に取り組みました。そこで旬のカボチャを使い、普段捨ててしまっている種やワタなど、カボチャを丸々使って調理する方法を、ポスターとレシピで紹介しました。

現在は、クイーンズ伊勢丹仙川店とのコラボレーションイベントとして、冬が旬で栄養価の高い葉物野菜であるケールの魅力を最大限に伝えるため、食育ポスターだけでなく販売スペースの装飾も学生が担当し、レシピで取り上げた野菜や食材と一緒に一週間、店内で特別展示を行っています。オリジナルレシピは、お客様に手に取っていただけるようケールと一緒に販売スペースに並べるだけでなく、さらにケールの魅力を伝えられるよう、レシピの調理動画を作成し、店頭で流してもらっています。また、その動画はお客様がご自宅で調理する際に視聴できるようYouTube配信もしています。

以上のように、私たち石渡ゼミは、長い年月をかけてその時代に合った食育活動をすべく、模索してきました。また、昨年、今年はコロナ禍で思うような活動ができない中、自分たちにできる事、するべきことを考えてきました。そしてこのコロナ禍での活動を通し、自分たちの活動の魅力をオンラインで伝える難しさを学ぶことができ、このような活動ができたことは私たちにとって大きな力となりました。

FWRの活動 パネル

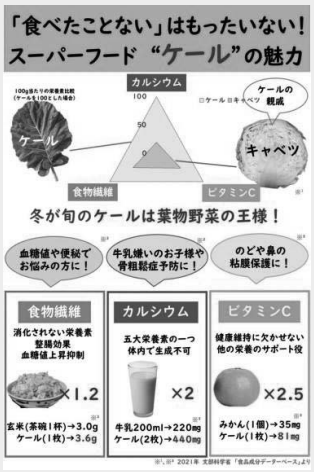
野菜の食育活動

跡見学園女子大学 石渡ゼミ

2013～2019年度 文京ハッピーベジタブルフェスタ

「野菜を食べて幸せになろう」をテーマに文京区で8月31日（野菜の日）を含む2日間でイベントが開催され、先輩方のブースには500人の方が来場！！

2020・2021年度
コロナ禍でも私たちは食育の活動を継続



クイーンズ伊勢丹様ご協力のもと
地域でも食育活動を実施！

熱中症啓発活動

跡見学園女子大学 石渡ゼミ
鹿田美那海・関　祥加・高井彩乃・繭山エマ・八田英恵

石渡ゼミでは、訪日外国人に向けて日本の暑さの危険性を知ってもらい、各自で熱中症の予防対策を心掛けてもらえるよう、2018年から「熱中症啓発プロジェクト」を立ち上げ、2021年までの4年間、啓発活動を行ってきました。熱中症啓発活動を始めた当初の目的は、東京オリンピックを機に訪日される外国人観光客に熱中症の危険性や対処法を知っていただくことでした。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大によってオリンピックが延期されたことで、2020年以降は訪日を楽しみにされている外国人に向けた熱中症の啓発を目的に活動してきました。

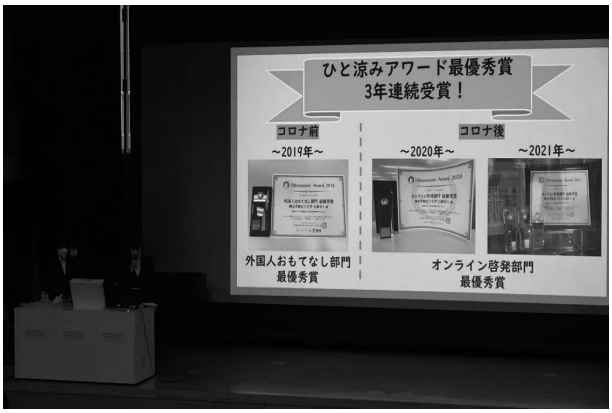
2018年の夏は、宿泊施設や観光地などで訪日外国人524人に対し、「熱中症の症状や危険性を知っているか」アンケートとインタビューを行いました。その結果、「欧米人は正しい熱中症対策を取ることができていない」ということがわかりました。

2019年の夏は、訪日外国人を対象に熱中症の危険性と予防法を伝える6日間のイベントを浜離宮恩賜庭園で開催しました。「このイベントが日本に訪れた外国人の思い出になるように」という考えから、浴衣姿で啓発活動を行い、おもてなしの心を込めてすべて英語で対応しました。イベントでは、熱中症クイズや体温を効果的に下げるための体験コーナー、SNSに投稿してもらうためのフォトコーナーなどをつくるほか、熱中症予防の商品サンプルや手作りの熱中症予防ハンドブック（英語版）を配布し、多くの外国人の方に熱中症の危険性や予防法を伝えることができました。

2020年には新型コロナウイルスの流行により、対面でのイベントを行うことができませんでした。そこでYouTubeを使って、楽しみながら熱中症を学ぶことができる動画やクイズを配信しました。また、熱中症に関する4コマ漫画を作成し、Instagram・Facebook・Twitterで日本の文化と熱中症のどちらも知って頂けるよう努めました。

そして今年度もSNSを使って熱中症の情報を配信しました。昨年配信した内容をさらに分かりやすい動画にし、熱中症の正しい知識を身につけていただけるようにしました。

YouTubeでは熱中症の予防法や対処法などの



12月25日に行われたシンポジウムでの熱中症啓発活動発表の様子①

12月25日に行われたシンポジウムでの熱中症啓発活動発表の様子②

12月25日に行われたシンポジウムでの熱中症啓発活動発表の様子③

シンポジウム熱中症啓発活動のパネル展示

YouTube

基礎情報だけでなく、救急車の呼び方や間違って浸透している対策など、焦点の当たりにくい熱中症の情報も紹介しています。さらに、マスク着用による熱中症のリスクなど、コロナ禍ならではの情報も日本語と英語で配信しました。合計48本配信した動画の総再生回数は、2021年12月22日時点で1,389回に達しています。

また今年は、日本へ訪れることを楽しみにしている外国人に暑い夏でも快適に楽しく東京を観光してもらうための情報を配信しました。熱中症の情報に加え、東京スカイツリータウン®にある「すみだ水族館」にご協力いただき、水族館の見どころと付近の観光スポットを紹介しています。コロナ禍で外出する機会が減少している今だからこそ、熱中症と新型コロナウイルスのどちらも対策しつつ、楽しく観光していただけるような内容になっています。

これらの活動が評価され、環境省後援の「ひと涼みアワード」で3年連続最優秀賞を受賞しました。2019年は「外国人おもてなし部門」、2020年・2021年はコロナ禍で対面の活動が出来ないながらもSNS中心の活動を行うことで、「オンライン啓発部門」の最優秀賞を頂くことができました。

以上のように、私たちはコロナ禍で思うような活動ができない中でも、SNSを活用し、目的を達成するため創意工夫を重ねて来ました。今後、新型コロナウイルスの感染状況に関わらず、今自分達にできることを探し、ゼミ活動を継続してまいります。

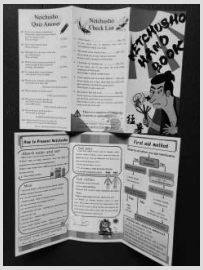
熱中症啓発活動

跡見学園女子大学
石渡ゼミ

2018年 訪日外国人に調査
2019年 浜離宮恩賜庭園でイベントを開催

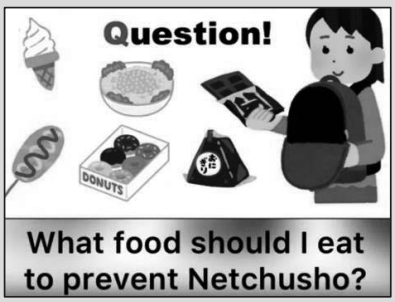
熱中症の認知度調査
524人にインタビュー！

熱中症の
危険性と予防法をレクチャー！



2020年・2021年
コロナ禍の影響によりSNSを使って熱中症の情報を発信

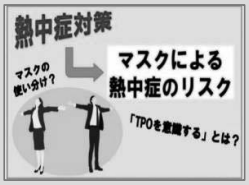
熱中症の危険性や予防法を
YouTubeやSNSで配信

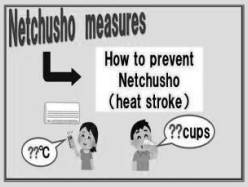


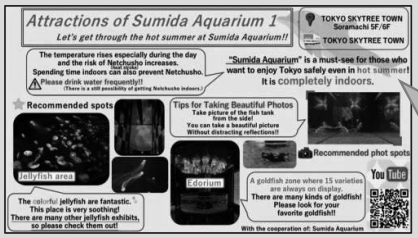
クイズや
4コマ漫画を作成

詳しくは
こちらから！

今年度は日本語版・英語版合わせて48本投稿
総再生回数は1284回！(2021年12月1日時点)







すみだ水族館様
ご協力のもと、動画を配信

ひと涼みアワード
三年連続
最優秀賞受賞
(2019年～2021年)

学生団体TIPSの活動紹介

東洋大学 学生団体TIPS
髙橋由奈・小山田萌佳

1．学生団体TIPSについて

TIPSは、2018年に設立された、『SDGs・ダイバーシティ×学生の成長』をテーマに活動する学生団体である。SDGsとダイバーシティを学生や同世代を中心に社会に広く発信するとともに、2030年のSDGs達成に貢献するため、企業や団体と連携したイベント開催や情報発信、講演・登壇活動、アイディアコンテストへの出場など、積極的に活動している。

2．コロナ禍への対応

メンバーのコロナウイルス感染防止と大学キャンパスの閉鎖に対応するため、2020年5月より活動のオンライン化を行った。SDGsを理念に掲げる団体として設立当初より入会手続きや情報発信等をペーパーレス化していたこと、多くのWEBツールの利活用に積極的に取り組んでいたことから、他の学生団体と比較しても早期のオンライン化を実現し、活動を中断することなく従来と同等以上の体制を構築した。移動や場所代などのコスト削減につながったほか、アルバイトやインターンシップ等様々な活動に取り組むメンバーのスケジュール調整が容易となり、コロナ前と比較して活動の活性化につながった。これにより、オンラインイベントの開催やWEBメディアの開始等、ニューノーマルに対応した活動を多く実現してきた。

①SDGsをテーマとしたオンラインイベントの開催

海洋汚染や食品ロス、プラスチックごみ、大量生産大量消費、貧困・経済格差、製造業の環境負荷などSDGsに関する社会課題の解決に取り組む企業をゲストに迎え、SDGsの背景にあるリアルな課題を学び、ひとりひとりができるアクション考えることを目指すオンラインイベントをこれまでに5回開催している。また、コロナ禍により学生の孤立が指摘されたことから、アプリケーションを利用した視聴者参加型のクイズ企画やイベント終了後の交流時間を組み込むことで、同じ会場にいなくても参加者同士のつながりを感じることができるイベント設計を行っている。これまで延べ200名以上の学生や社会人が参加している。

②オリジナルWEBマガジン RECTの運営

オンラインイベントの開催と併せて、SDGsとダイバーシティをテーマに、それらに取り組む企業の創設者や代表をメンバーが取材し記事にして発信するオリジナルWEBメディア RECTを2021年2月に開設した。店舗やサービス、身近な製品などを取材対象にすることで、読者が記事を通じてSDGsに関する社会課題を知り、実際にお店を訪れる・サービスを使う・商品を買うといったアクションにつなげることができるメディアを目指し、これまでに13本の記事を公開している。2022年からは、より多くの人に、より読みやすく記事を届けるため、メディアプラットフォーム noteにも記事の掲載を開始した。

3．課題と今後の展望

オンラインでの活動の活性化に一定の成功を収めた一方で、SDGsやダイバーシティの普及には「体験の共有」や「思いへの共感」が重要で

あると感じており、オンラインの企画内容の強化や、オフライン（対面）の機会の活用をする必要があると考えている。コロナウイルスの動向を注視しつつ、企業や地域と連携してオンラインとオフラインを組み合わせた企画を実現したい。また、同世代を中心に社会に広く発信するために、他団体や他大学とのネットワークを強化する必要があるが、学生が対面で集まる機会が大きく減少したため、積極的なつながりづくりに取り組む必要があると感じている。これについては、昨年より東洋大学以外の学生のメンバー加入を開始し、現在は東洋大学を含む3大学の学生で活動しているほか、文京区内の他大学の学生団体との共同企画の準備を進めており、さらに多くの学生や社会人にリーチする発信を行っていきたい。

2021年2月に開始したオリジナルWEBメディア『RECT』

SustainaSeedへのRECTオンライン取材

REDAと開催したオンラインイベントの様子

アイヌの語り部をお呼びし、他の学生団体メンバーも参加したオンライン勉強会

学生団体TIPSの活動紹介 パネル

コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性

学生団体TIPSの活動紹介

髙橋 由奈・小山田 萌佳

TIPS

学生団体TIPS 団体概要

TIPS

- 名　　称：TIPS（ティップス）
- 設　　立：2018年7月11日
- 団　　体：学生団体（任意団体）
- 拠　　点：東洋大学白山キャンパス（文京区）
  所属メンバー：東洋大学（北区）・日本女子大学（文京区）・中央大学（新宿区）
- 活動テーマ：SDGs・ダイバーシティ×学生の成長
- 理　　念：哲学するサークル活動

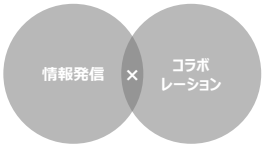
SDGsに取り組む団体として、様々なツールを活用し、設立当初より完全ペーパーレスで活動。2020年5月に活動を完全オンライン化し、コロナ禍で活動を加速。

2　Copyright TIPS All Rights Reserved.

TIPSの取り組み

TIPS

- オンラインイベント開催
- オウンドメディア運営
- イベント・シンポジウム登壇
- コンテスト参加
- ボランティア活動
- 勉強会開催　など



17 パートナーシップで目標を達成しよう

多くの企業・団体などとコラボレーション して、
学生・若い世代をはじめ、社会に **SDGsとダイバーシティを発信** しています

3　Copyright TIPS All Rights Reserved.

コロナ禍での活動　①SDGsをテーマにしたオンラインイベントの開催

TIPS

- SDGsをテーマにゲストを迎え **SDGsを学びアクションを広げるオンラインイベントを開催**

BOTLTO ボトルト株式会社　プラごみと海洋汚染
食品ロス問題
KIMICA　製造業と環境・貧困問題
REDA　サステイナブルファッション

4　Copyright TIPS All Rights Reserved.

コロナ禍での活動　②オリジナルWEBマガジン RECT

TIPS

- 団体で運営するWEBメディアを通じて **SDGsに取り組む企業の取り組みを発信**

**SDGsに関する企業の取り組みを学生が取材。
“背景にある課題” と “読者ができるアクション” を
記事にして発信**

5　Copyright TIPS All Rights Reserved.

コラボレーション実績

TIPS

- 設立から約3年で **25以上の企業や団体と SDGsを軸としたコラボレーションを実現**

マイナビ 学生の窓口 / BOTLTO ボトルト株式会社 / KIMICA / REDA
東洋大学 / actcoin for a better world / Earth Day Tokyo
SustainaSeed / ケムラン・文京区
LIMEX / サークル図鑑 PRODUCED BY トーキョー学生図鑑
GREENPEACE / Human Rights Now
Ponopono / COOON
GYIs Global Youth Innovators
オーガニック食育教室 ビオモア NEW

6　Copyright TIPS All Rights Reserved.

メディア掲載

TIPS

- 取り組みを評価いただき、**複数のメディアに掲載**

7　Copyright TIPS All Rights Reserved.

ありがとうございました

TIPS

- TIPSに興味を持ってくださった方、活動の詳細 や お問い合わせ は以下まで

ホームページ

https://toyotips.themedia.jp/

東洋大学 TIPS　検索

SNS・連絡先

tipstoyo@gmail.com
@TOYO_TIPS
@TOYO_TIPS
もあります！

8　Copyright TIPS All Rights Reserved.

コロナ禍のスタート
―菊坂跡見塾での活動と今後の課題―

跡見学園女子大学 跡見「学芸員」in菊坂
菊地春姫・渡邉菜月

1．菊坂跡見塾と活動について

伊勢屋質店とは、万延元（1860）年の創業から昭和57（1982）年の廃業まで120年以上の歴史を持つ質店で樋口一葉が通った質店としても知られている。明治期に建てられた質店の建物は、平成28年3月に文京区指定有形文化財に指定されている。そしてこの質店は現在、菊坂跡見塾として跡見学園女子大学の教室となっている。

私たち、「跡見『学芸員』in菊坂」は2020年の9月、菊坂跡見塾に残された資料の整理と菊坂跡見塾を活用した地域交流を目的に発足した。

2．当初目標と実現した活動

発足当初は、地域の人々を菊坂跡見塾に招いて整理した資料を見てもらい、菊坂について教えを請う形で地域交流のきっかけをつくりたいと考えていた。しかし、実際にはコロナ禍により菊坂跡見塾に人が集まることができなくなってしまった。そこで、コロナ禍において私たちはどのように資料整理を進めるか、また地域の人々を招くだけではない菊坂跡見塾を活用した地域交流の在り方を模索してきた。

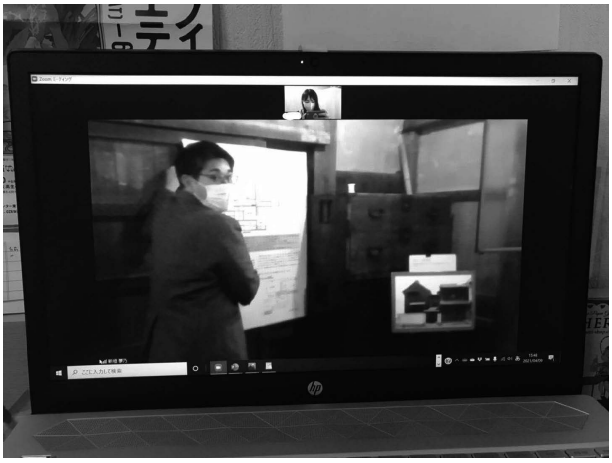
2.1.七夕企画

菊坂跡見塾を活用した地域交流の内の一つが、七夕企画である。これは、2021年7月7日に地域の保育園と協力してできた企画で、保育園児たちを招き、紙芝居上演を計画していた。メンバーが対面で集まることができない中での準備作業は困難だったが、企画者を中心に遠隔で作業を行い、準備を整えることができた。当日はあいにくの降雨により園児たちを招くことはできなかったが、笹と短冊を保育園に持ち込み、飾りつけを楽しんでもらうことができた。

2.2．資料整理と『ゆかり』への投稿

次に、私たちの活動の軸となる資料整理の作業と、跡見学園女子大学地域交流センター年報『ゆ

学芸員からレクチャーを受ける様子



Zoom越しに展示をつくる様子

メンバーがデザインした暖簾をかける様子

一葉忌での集合写真

かり』への投稿について述べる。

資料整理には、現地でしかできない測定作業や、自宅でもできる入力作業などがある。そこで、作業分担を明確にしたうえで作業を進めた。調査のスピードは遅くなりがちだったが、かえって資料についてじっくり調べたり、調べた中で得た知識から興味関心を広めたりする余裕ができた。そのため、投稿の際は調査時にメンバーが関心を寄せたテーマをもとに、コラムを執筆することができた。

2.3．菊坂跡見塾を文化施設として活用した活動

菊坂跡見塾は文化施設ということもあり、学芸員の方との交流や防災について消防署と交流することも進めてきた。資料の取り扱いについて現役の学芸員の方からレクチャーを受けたり、台東区立一葉記念館で樋口一葉の直筆原稿資料を閲覧させていただいたりする機会もあった。

また、活動中にはメンバーが考案した暖簾を菊坂跡見塾の入口にかけ、建物の中の様子を伺いやすいように雨戸もあけ、活動していることを地域の人々に知ってもらえるように意識した。そういった活動の中で、2021年11月23日の「一葉忌」には、地域の方々と協力してイベントに参加することもできた。

3．コロナ禍での収穫と今後の課題

以上のような経験を私たちはコロナ禍で積んできた。私たちの活動において、コロナによる一番の弊害は菊坂跡見塾に集まることができなかったことだと考える。それは、菊坂跡見塾に地域の方を招くことができないことの他、活動の軸である資料整理が進まず、地域の人々に調査結果を還元することがなかなかできなかったことにつながる。

しかし、その弊害は私たちにとって、菊坂跡見塾でどのような活動を行えるか多角的に考える機会となった。資料整理に留まらない挑戦的な取り組みは、コロナ禍の焦りと模索の時間から生まれた貴重な収穫であったと考える。また、直接メンバー同士が顔を合わせる機会が少なく、連携がとりづらいというマイナス面もあった。しかし、それはかえって案や意見を出す際に、学年や場の空気間に囚われない自由な発想に繋がっていたと感じている。

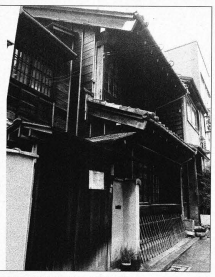
今後の課題としては、まず私たちの活動の土台を確立することが必要だと考えている。同時に今後の活動では、資料整理の成果を菊坂跡見塾の活用にどのように結び付けていくのかについても、検討していかなくてはならないと考えている。

跡見「学芸員」in 菊坂 パネル

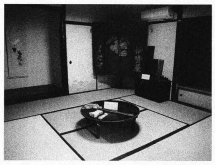
跡見「学芸員」in 菊坂

コロナ禍のスタート

－菊坂跡見塾での活動と今後の課題－



菊坂跡見塾と活動について



〇菊坂跡見塾【旧伊勢谷質店　創立１８６０年】
✓建物：文京区指定文化財
（明治20年移築）
✓エピソード：樋口一葉ゆかりの歴史的建造物

〇跡見「学芸員」in菊坂
✓2020年9月発足
活動内容：資料整理・地域交流

初期活動イメージと実現した活動

【初期イメージ】
・地域の人を呼び込む
→整理した資料を見てもらう
・菊坂の人々に菊坂について教えを乞う

★地域の人との相互交流
（呼び込み型）

【実際の活動】
・資料整理
・広報誌『ゆかり』寄稿
・地域交流
　七タイベント（保育園）
　一葉忌イベント（菊坂住民）
・地域を飛び出した活動
　和紙制作
　山梨出張

資料整理(ゆかり)

- 資料の記録及び撮影
- 記録を元に目録作成
- 長唄、くずし字についてのコラム作成

七夕企画

- 地域の保育園と協力して企画
- 紙芝居「織姫と彦星」
- シナリオ、イラスト等を分担して作成

その他の活動

- 学芸員の方から資料整理のレクチャーを受ける
- 地域の人と協力して一葉忌に参加
- 文化財の防災のため消防署と協力
- 台帳の修復を企業に依頼

コロナ禍での収穫

・大人数で集まれない➡軸である資料整理ができない➡模索の時間➡文化施設の在り方の新発見

・活動開始ーコロナ禍➡メンバーの顔をお互い知らない➡学年や空気感にとらわれない活動、アイデア発信

今後の活動・課題

- 活動の土台を確立させる
- 資料整理が終わった後の目標設定：資料の展示企画
- 菊坂跡見塾をどう活用していくか
- 次世代への引き継ぎ

中央大学ボランティアセンター公認学生団体りこボラ！「繋がりを止めるな！　りこボラの挑戦」

中央大学 理工学部2年 りこボラ！副代表
小松莉子

りこボラ！は中央大学の公認学生団体で、現在は約150人の団体で、その中の役150人で団体を運営しています。理系の学生でもボランティアに興味をもち、ボランティアを楽しみたいと思っているということから、「理系でもボランティアを日常に！」という理念で活動しています。

私たちの通っている後楽園キャンパスにはボランティアセンターが無いため、ボランティアのコーディネートをしてもらえる場所がありません。そこで、ボランティアの紹介、企画から参加まで、中央大学の多摩キャンパスのボランティアセンターに協力を仰ぎつつ自分たちで全部やってしまおうという意気込みで活動しています。

コロナ禍でできなくなってしまったこととしては、対面での会議、交流や、対面の大規模なボランティアなどの人とのつながりが重要なボランティアがあります。また、対面の活動が困難になってしまったことから、外部とのつながり、特にそれまで関わっていただいていた地域の方とのつながりが途絶えてしまいました。

ボランティアをすること以前に私たちはまず団体の維持が不安な点の1つでした。そこでオンラインの会議や交流会を頻繁に行って団体内の繋がりを欠かさないようにしています。

ボランティア団体としてボランティアを続ける工夫も行っています。ゴミ拾いアプリを利用してメンバーそれぞれが自分の住む町で自主的にゴミ拾いをする企画を数回行っています。一緒に活動することができなくても他のメンバーがゴミ拾いを頑張ったことはアプリを通して覗くことができました。また、ゴミ拾いの報告会を行うことで、ひとりでゴミ拾いを行ってはいても、同じ想いをもった仲間がいるという感覚にもなり、団体としてのモチベーションを支えています。

ボランティア体験の共有のイベントも行っています。ボラカフェといい、ボランティアを経験したメンバーから体験談を聞くイベントです。今までは対面で行っていましたがコロナ下によりオンラインで実施しています。ボランティアの体験談を聞くことで、こんなボランティアがあるのだという気づきや、コロナが落ち着いたら参加してみたいというボランティアを増やす

オンライン交流会の様子

ゴミ拾いで回収したゴミ

ゴミ拾いの様子

集合写真

きっかけとなることを目指しています。

コロナウイルスの感染状況が少し落ち着いているときには対面でのゴミ拾いボランティアもしています。私たちが日頃お世話になっている大学の周辺で行いました。この企画は大学の周りをきれいにして少しでも地域に貢献したいという思いで活動しています。

私たちはボランティアに参加し、経験を経て、得たものを発信し、共有し、共有から新たな気づきをまたボランティアの参加に活かすという流れを意識しています。この流れを「りこボラ！サイクル」と呼んでおり、ボランティアに参加するだけで終わらないようにすることを大切にしています。しかし現在はコロナ禍により、りこボラサイクルの「ボランティアの参加」のところから行き詰っています。コロナで途切れてしまった地域の方々とのつながりを再度構築しようとしている団体なので、文京区にある大学としてこれから様々な繋がりをもてたらと思います。

大学の公認団体として団体で活動することの制限、企画として集合する際の厳しい人数制限などの課題がありますが、工夫して文京区の地域交流に参加したいと思っています。

中央大学ボランティアセンター公認学生団体りこボラ！ パネル

ISR-ConnAction活動報告

東洋大学
髙橋由奈・鎰谷愛希

1．ISR-ConnActionについて

ISR-ConnActionは東洋大学の公認国際ボランティアサークルである。

名前の由来は、Individual Social Responsibility - Connection and Actionの略語であり、「やさしい社会を創るために、行動を起こして人をつなげる。」という思いが込められている。

2013年にフィリピンで起きた台風ヨランダをきっかけに団体が発足し、その後フィリピンを中心にボランティア活動を行ってきた。また、東洋大学の学園祭である白山祭では、展示会による活動報告やバングラデシュを拠点とするサクラモヒラという団体の紅茶の代理販売を行った。

フィリピンでのボランティア活動

2．コロナ禍での活動

新型コロナウイルスのパンデミックにより、私たちの活動の中心であったフィリピンへの渡航が困難になったため、2020年度から、「大学のキャンパスがある文京区白山とつながり、地域を盛り上げる。」という活動にシフトした。

実際に行った活動は以下の通りである。

①白山交流会

オンラインで地域のお店の方を招待し、学生や地域の方とお店の方の交流の機会作りをした。

白山交流会での様子、オンラインでパンナコッタ作りをした

②フードパントリー

文京base主催で行われているフードパントリーは食料が必要になった人が誰でも食料を受け取る

フードパントリーのお手伝い、小石川一ハラーメンさん

ことができるものである。セカンドハーベストジャパンからいただいており、食料の受け取り申請者に向けて、お渡しをお手伝いをしている。

③居場所づくり

小石川植物園のすぐ近くにある「さきちゃんち」という多世代型のみんなの居場所のお手伝いをさせていただいている。これは今のISR-ConnActionの中心の活動になっている。

これまでは、内装のDIYや地域の方向けのイベントの企画・実施をしてきた。

七夕イベントでは、笹の葉と竹あかりを装飾し、お願いごとを書いたり、演奏会、読み聞かせをした。ハロウィンでは、ハロウィン仕様の射的と釣りのゲームを用意し、子どもたちが楽しめるイベントを実施した。

さきちゃんちでペンキ塗りのお手伝い中

3．活動を通して得られたこと

これらの活動を通して、多くのことが得られた。

文京区で面白いことをしている方とつながり、一緒に活動することができた。それにより、新たなことに挑戦する機会をいただけたことは大きな収穫である。また、居場所づくりのお手伝いにより、地域の方々だけでなく、私たち自身の居場所を創ることができたと感じている。さらに、学校では座学で学ぶことがほとんどだが、以上のようなサークル活動を通して、実際に人と交流し、一緒に活動することで地域や組織についての理解を深めることができた。

実際に一緒に活動しているメンバーの多くも、地域の方との交流に新鮮味と楽しさを実感できているようである。

4．今後に向けて

ISR-ConnActionに所属する学生のほとんどが国際学部生であることを生かし、今後は留学生を巻き込んで、何か活動ができたらと思っている。また、今回のシンポジウムを通して、文京区内で面白い活動をする学生さんがたくさんいるということを知ることができたので、そんな皆さんともつながって活動ができたらと思う。

これからも、人とのつながりを大切に地域とつながり盛り上げていきたい。

2021年度 東洋大学 ISR - ConnActionn 活動報告

Individual Social Responsibility
Connect and Action
やさしい社会を創るために、行動を起こして人をつなげる

1、 白山交流会

地域のお店の方をお招きした
学生と地域の方のオンライン交流会

2、フードパントリー

文京baseで
文京区に住む生活困窮者への
食料無料提供のお手伝い

3、さきちゃんち

多世代向けの居場所づくりの
お手伝い
DIYやイベント企画
（七夕・ハロウィン）

ISR-ConnAction
公式SNS

Twitter
@_Osprj

Instagram
@isrconnaction

本日の発表者
個人Twitter

高橋由奈
@YuunaIsr

鎧谷愛希
@akiKLH

今よりももっとボランティアが応援される社会

東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ
渡邉蛍都・杉本昂熙

東洋大学にはボランティア支援室という、学生にやりたいボランティアを紹介したり、大学全体の社会貢献活動を推進する機関があります。私たちはそのボランティア支援室のサポートスタッフ（以下サポスタ）として日々活動しています。サポスタは大学1年生から4年生の15人前後のメンバーで日々活動しています。本シンポジウムでは私たちサポスタの普段の活動や、サポスタである私たち自身のボランティアに対する魅力を自身の経験をもとに発表しました。

私たちサポスタが目指す社会は、「今よりももっとボランティアが応援される社会」です。やはり今でも、ボランティアをやっているというと、「お金にならないのになんでやっているの？」や「自分のためにならないから偽善者じゃない？」などと言ったボランティアに対するネガティブなイメージを持たれてしまうことがあります。そんな現状を私たちはどうにか改善したいと思い、行動しています。大学生がボランティアをやっていることを友達や家族に伝えた時に、背中を押してもらえるような社会を目指しています。この社会の実現のために具体的に私たちサポスタが行っていることは、「学生目線でボランティアの知識や魅力を発信する」ということです。確かに、大人や専門家から正しいボランティアの知識や魅力を教わることも大切だと思います。しかし、学生が学生に対して、自分の経験や実際に感じたことを踏まえながらボランティアの魅力や知識を伝えることの方が学生の心を揺らすのではないかと考えます。私たちサポスタのビジョンとミッションには学生目線という観点が大切にされています。

サポスタが学生目線でボランティアの魅力や知識を伝えるために行っている活動は、主に2軸存

タイトルページ表紙

日本経済新聞全国紙－渡邉蛍都取材記事

東京ボランティアレガシーネットワーク－杉本昂熙取材記事

サポスタ集合写真

在します。一つは、ボランティアを学ぶ活動です。もう一つは、ボランティアの魅力を伝える活動です。ボランティアを学ぶ活動では、2019年にカンボジアフェスティバルに足を運び、後日事後学習会を開き、正しいボランティアとは何かを考えました。また、ボランティアコーディネーションに関する本を使い、継続的にオンラインボランティア勉強会も開催しています。ボランティアの魅力を伝える活動では、ゲストスピーカーを招き、実体験をもとにその時のテーマのボランティアについて話し合うボランティアカフェ、貧困をテーマにした上映会、大学の講義でサポスタが登壇してボランティアの魅力を学生に伝えるボランティア入門講座を開催しています。

サポスタ外での活動から学んだことをサポスタの一員として、渡邉は自身の東北ボランティアの経験から下記の内容を発表しました。「高校時代に、東北の被災地ボランティアに参加しました。本当に役に立てていたのか、お客様になってしまっていないかと後悔が残りました。この経験から、大学でも東北に貢献したいと思い、ホタテ漁師さんのもとでボランティア活動やインターンシップに参加しました。そこで、人との繋がりを大切にしたことからご縁に繋がり、現在はホタテアンバサダーに任命され、全国に東北とホタテの魅力を届けています。私が思うボランティアの魅力は、人との繋がりや新しいきっかけをもらえることだと思います。春からはNPOへ就職し、次は私が全国の学生に地域の課題解決に挑戦する場を提供していきたいです。」続いて杉本も同様にボランティアの魅力を述べました。「私は学生団体おりがみという団体で代表を務めています。私はボランティアの活動として、子供たちにパラスポーツ体験会を開いたり、上野の分断された町をお祭りで繋げたり、炎を成層圏に打ち上げて共生のシンボルをつくったりしています。私はボランティアを通して、子供の笑顔も、地域の分断も、宇宙も自分ごとにすることができました。世界平和や共生社会といった大きなものを目指すことを自分ごとにすることはとても難しいことだと思います。しかし、ボランティアを間に挟むと一気に社会が自分ごとになります。これがボランティアの可能性であり、魅力だと感じます。」

私たちは学生だからこそ感じることのできたボランティアの魅力を学生に今後も伝えていき、今よりももっとボランティアが応援される社会をつくります。

東洋大学ボランティア支援室サポートスタッフ パネル

東洋大学
ボランティア支援室サポートスタッフ

VISION
今よりももっと
ボランティアが
応援される社会

MISSION
学生目線で
ボランティアの
知識や魅力を発信する

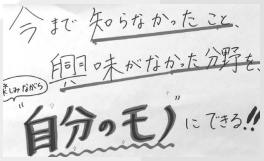
Ⅰボランティアについて学ぶ活動

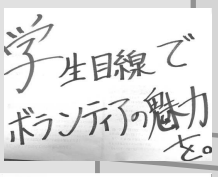
カンボジアフェスティバル｜夏ボラ
ボランティアコーディネーション力勉強会
学生ボランティア活動支援連絡会

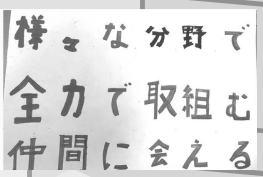
Ⅱボランティアの魅力を発信する活動

ボランティア入門講座｜ボラカフェ
映画上映会｜サークルオンライン説明会

メンバーの想い







2月11日の文京まちたいわフェスで再開しましょう
―文京まちたいわフェスと跡見学園女子大学の連携について―

跡見学園女子大学
井上桃香・釜　菜摘・佐野桃羽

私のグループでは、シンポジウムで「文京まちたいわフェス」について発表した。発表内容としては、文京まちたいわフェスの意味の説明と普段の活動内容について、コロナ前と後との活動の比較、2月11日のまちたいわフェスの宣伝をした。まず、「文京まちたいわフェス」の言葉の意味を理解してもらうために、文京まちたいわと文京まちたいわフェスの説明をした。そもそも、「文京まちたいわ」とは、文京区を拠点として活動する人たちが新しい活動を広げていくためのオープンなつながりの場のことをいい、「文京まちたいわフェス」とは、まちたいわの有志が中心となってつくる、地域の多様なつながりをお祝いして楽しむ、お祭りのことをいう。対面での文京まちたいわフェスでは、ワークショップを開催したり、巨大アートを会場全員で書いたり、お昼には全日本芋煮同好会の方が作って下さった芋煮を頂いた。我々、跡見生は受付業務と出展者さんへのインタビューを体験した。コロナ前は、フェスが終わってから我楽多工房に参加者が集まり、打ち上げをした。打ち上げでは、我楽多工房の説明や普段の地域活動をしていく上での工夫点やこれから、やりたいことなどを話した。コロナ前は、月に1回現地でミーティングをしていたが、コロナ後はオンラインで（zoom）での、ミーティングに変わった。元々、月に1回のミーティングだったが、それではフェスの内容がなかなか決まらず、いつも最後になって焦ることが多かった。そのため、私が「週一の会議にしないか？」と提案したところ、賛同してくれる人が多く、週一のミーティングに変わった。毎週のミーティングは、本郷22515から配信するが現地に行って、参加してもいい。会議は、いつも21時すぎに終了するが現地に行くと、つい長話になってしまう。それも楽しい。

コロナ後のフェスでは、オンラインだったため、私はつゆくさ荘から発表した。まちたいわフェスでつゆくさ荘の発表をしたことにより、多くの方につゆくさ荘の活動内容や場所などを知ってもらえた。最後には、2月11日に実施される、文京まちたいわフェスの宣伝もした。いつも文京まちたいわフェスは、知っている人や地域づくりに関心がある人が来る機会が多かったが、今回シンポジウムで学生を中心に発表したことにより、「文京まちたいわフェス」というものがどういうものか知ってもらえて良かった。「地域活動」と聞くと、高齢者や元々参加している人が多いイメージだが、学生が参加していることにより、親近感がわくと思う。

今回のシンポジウムを通して、跡見生や文京区の他の大学がどんな活動をしているか知れるいい機会になった。それぞれの発表が終わってから、自分が気になった地域活動をしている団体さんに声をかけに行き、詳しく普段の活動内容を知ることができた。シンポジウムを通して、多くの団体さんのつながりを感じることができ、これからの活動をもっと頑張ろうと思った1日だった。

この写真は、まちたいわフェスが対面で実施されたときの準備の様子だ。跡見生からは、5人参加した。初の参加で緊張しましたが、他の団体さんが優しくサポートして下さったおかげで、有意義な時間を過ごすことができた。

2020年度のまちたいわフェスの写真!! 2020年度のまちたいわフェスは、対面ではなくオンライン配信だったので、私はつゆくさ荘から中継した。

2020年度のまちたいわフェスの様子!! こんなにたくさんの人の前で、つゆくさ荘の発表をしたんですね（笑）

2020年度のまちたいわフェスの写真である。つゆくさ荘の発表をする前に、本郷22515からグループワークをした。

文京まちたいわフェス パネル

跡見学園女子大学地域交流センターブックレットvol.2
コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性

発行日：2022年3月15日
編　者：跡見学園女子大学地域交流センター
発　行：跡見学園女子大学地域交流センター
〒112-0012　東京都文京区大塚1丁目5-2
電　話：03-3941-7420
印　刷：セントラル印刷（株）

コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性

2022年3月

刊行によせて …… 跡見学園女子大学地域交流センター

開会宣言 …… 土居洋平

開会の挨拶 …… 笠原清志

第1部　2020年以降の各大学の地域交流活動の取組み

地域連携のあり方：学生のwantsと地域のneedsの組み合わせ …… 古市太郎

コロナ禍の中の東洋大学ボランティア支援室
～リアル課外活動が停止した状況の中で～ …… 日比野 勲

コロナ禍における地域交流活動 ―跡見学園女子大学の場合― …… 土居洋平

第2部　大学に求めること ―活動の担い手に聞く―

コロナ禍での地域映像制作の取組み ―コミュニティバスB-ぐる車内映像制作プロジェクト活動報告―
…… 山岸樹璃・釜 菜摘・波多江詩織

コロナ禍における地域活動：ふじみ野キャンパス編 …… 近日向子・中舘莉子

コロナ禍における地域活動：本郷キャンパス編 …… 荒井美咲・駒津舞香

シンポジウム報告書
氷川下つゆくさ荘×跡見女子大 …… 上野穂乃佳・小松美月・佐久間愛美

デイキャンプで遊ぼう会
～千葉県の里親子と大学の共同デイキャンプ～ …… 下田昂輝・杉原みなみ・上田安希子

地域のひきこもり支援団体との協働 …… 久保杉真名佳・茶村菜々子

地域の食品ロスを減らそう！ …… 鈴木翔太

野菜の食育活動 …… 鹿田美那海・関 祥加・高井彩乃・繭山エマ・八田英恵

熱中症啓発活動 …… 鹿田美那海・関 祥加・高井彩乃・繭山エマ・八田英恵

学生団体TIPSの活動紹介 …… 髙橋由奈・小山田萌佳

コロナ禍のスタート ―菊坂跡見塾での活動と今後の課題― …… 菊地春姫・渡邉菜月

中央大学ボランティアセンター公認学生団体りこボラ！
「繋がりを止めるな！ りこボラの挑戦」…… 小松莉子

ISR-ConnAction活動報告 …… 髙橋由奈・鎰谷愛希

今よりももっとボランティアが応援される社会 …… 渡邉蛍都・杉本昂熙

2月11日の文京まちたいわフェスで再開しましょう
―文京まちたいわフェスと跡見学園女子大学の連携について― …… 井上桃香・釜 菜摘・佐野桃羽